



古言譯通

冬

利
388
5

ホ 2
389
5



利
388
5

東京大学
学芸部
図書

本 2
389
巻 5

ま部	初丁	る部	五十八丁
み部	十二丁	れ部	五十九丁
む部	十九丁	わ部	六十丁
め部	二十二丁	を部	六十二丁
も部	二十七丁	を部	六十三丁
や部	三十一丁	を部	六十四丁
ゆ部	三十五丁		
よ部	四十四丁		
ら部	五十四丁		
り部	五十八丁		

古言譯通冬

目一

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

古言譯通冬

藤原雅澄撰

○ま部

まかる

五卷 一、唐能遠境尔都加播佐礼麻加利伊麻勢云々

とあるハ、シサツテ御出ナサルレバと云意あり。

まく

二卷 一、久堅乃天見如久仰見之皇子乃御門之荒卷

惜毛七卷 一、真珠付越能菅原吾不萌人之萌卷惜菅

原十卷 一、打細尔鳥者雖不喫繩延守卷欲寸梅花鴨

どあるハ荒ンコトガ刈ンコトガマモランコトガと云
意なり六卷四十二視人乃語丹為者聞人之視卷欲為御
食向味原宮者云く七卷廿五二欲見戀管待之秋芽子者
花耳開而不成可毛將有などあるハミンコトヲと云意
なり同卷十四二時風吹麻久不知阿胡乃海之朝明之塩
尔玉藻荇奈とあるハフカンコトヲと云意なり又廿玉
津島見之善雲吾無京往而戀幕思者とあるハコヒンコ
トヲと云意なり又君尔戀麻久とやう二結めさるむハ
コヒンコトヨと云意よなること吾戀居久と結めさる
をコヒラルコトヨと云意なるよ相准べし

まぐの古ンコトガ
十卷十五二見渡者春日之野邊尔立霞見卷之欲君之容
儀香九卷十九二問卷乃欲我妹之家乃不知などあるハ
ミンコトガトハンコトガと云意なり
まぐは
二卷十二二吾里尔大雪落有大原乃古尔之郷尔落卷者
後とあるハフランコトハと云意なり廿卷五十二宇知
比左須美也古乃比等尔都氣麻久波美之比乃其等久安
里等都氣己曾とあるハツゲンコトハ或ハツゲンヤウ
まハと云意なり

まくを
ンコトヲ

四卷^五一^丁月夜^{ツクヨ}尔波^ハ門^{カド}尔立^{ニタチ}出^{イデ}夕^{ツキ}占^{ケトヒ}問^{アウラ}足^{ラフ}ト乎^ソ曾^{セシ}為^カ之^タ行^カ
乎^ホ欲^{ホリ}焉^リとあるハ、イカ^ンコトヲと云意なり。八卷^五十^丁一^下。
天^{アマ}霧^ギ之^シ雪^{ニキ}毛^モ零^フ奴^ヌ可^カ灼^イ然^{ロク}此^コ五^イ柴^{ツシ}尔^ニ零^フ卷^マ乎^ヲ将^ミ見^ムとあるハ
フ^ラン^コト^ヲと云意なり。

まくも
ンコトモ

十卷^四十^丁一^下。吾^ワ屋^ヤ戸^ド之^ノ麻^マ花^ハ押^{オシ}靡^ナ置^{オク}露^{ツユ}尔^ニ手^テ觸^{フレ}吾^ワ妹^モ兒^コ落^{カラ}卷^マ
毛^モ将^ミ見^ム十^四一^丁一^下。音^{オト}耳^ノ乎^ヲ聞^キ而^テ哉^ヤ戀^{レム}犬^マ馬^ソ鏡^{カミ}目^メ直^タ相^ニ而^テ戀^レ
卷^マ大^オ口^ホちどあるハ、チ^ラン^コト^モコ^ロン^コト^モと云意
なり。古今集よいざこゝに我^カ世^セハ經^カむすむすらやふ

まくに
ンコトヂヤニ

トみのさとのあれまくもをしとあるも同本、
七卷^卅八^丁一^下。不^タ絶^ズ逝^チ明^ア日^ス香^カ川^ハ之^ノ不^ヨ逝^ド有^ラ者^バ故^ユ霜^{シモ}有^ル如^ド人^ト之^ノ
見^ミ國^{クニ}とあるハ、ミ^ンコト^ヂヤ^ニと云意なり。をべてかく、
けく、さく、ふく、はく、まく、らく、ななどの類みれ同格よ用く
辞よて、譯言も大のと同トさまなり。なを各、其條を照
考て准、知べし。

まくも
タン子ル
クメン
手ニ入ル

七卷^廿五^丁一^下。兒^コ等^ラ手^テ乎^ヲ卷^マ向^ム山^{ヤマ}者^ハ常^ツ在^ナ常^ド過^ス往^シ人^{ヒト}尔^ニ往^キ卷^マ目^メ
八^ハ方^ハとあるハ、イ^カヤ^ウニ^タン^子テ^イタ^トテ^モト^テモ

タン子得ルコトハアルマイとの謂なり。廿卷五十。山
 河乎伊波祢左久美豆布美等保利久尔麻藝之都云々
 とあるハ。國ヲタン子テ。或ハ國ヲクメンシニ。と云意な
 り。日本紀神代下。覓國此云矩貳磨儀とあり。古事記八
 千矛神御歌。夜知富許能迦微能美許登波夜斯麻久尔
 都麻。岐迦泥氏云々。とあるも同ト。○古事記神武天皇
 條御歌。延袁斯麻加牟とあるハ。ヨイ女ヲ手ニイレウ
 との御意なり。
 まく○まくらく 枕ニスル
 二卷八。如此計戀乍不有者高山之磐根四卷手死奈麻

死物乎とあるハ。磐ヲ枕ニシテと云意なり。同卷四十。
 鴨山之磐根之卷有吾乎鴨不知等妹之待乍將有とある
 也。磐ヲ枕ニシタと云意なり。五卷十一。伊可尔安良武
 日能等伎尔可母許惠之良武比等能比射乃倍和我麻久
 良可武十九十四。妹之袖和礼枕可牟河湍尔霧多知和
 多礼左欲布氣奴刀尔などあるハ。枕ニ為ウと云意なり。
 枕ニシと云意なるを。枕伎枕ニスルと云意なるを。枕久
 枕ニシタと云意なるを。枕氣流と云こと。古語の常なり。
 蔓伎蔓久など云と全同格なり。
 まぐはー 見アキノナイ

十三_丁五_二己許乎志毛間細美香母挂卷毛文恐山邊乃五
十師_シ乃原_{ハラ}内_{ウチ}日刺_ヒ大宮都_{オホミヤツカ}可倍_ヘ朝日_{アサヒ}奈須_{ナス}目細_{マクハシ}毛_モ暮日_{ユフヒ}奈
須浦_{スウラダハシ}細毛_モ云くとある間ハ借字_リよて目細_{マクハシ}と書るの正字
なりさて細ハその細微_{クハ}しくして絶妙_{ヨキ}を称_タ云ことよて
目細_{マクハシ}ハ見アキノナイと云ことなり古事記_{コト}遠津_{トホツ}年魚_{アユ}
目_メ微比賣_{ヒメ}日本紀_{ニッポンキ}眼妙媛_{メタケノメ}とあるも女の良_{ヨキ}此見あき
のなきを称_タ美_メとる名なり

まけ年月 月日 日數

まけハ真來_{マキ}經_キの約_ヒれる詞_{コト}なりけ部考_ベ合_ベイ。部_ベのあさ
まけのまに_ニ オフセ付_ラレルマ、ニ サシタテ_ラレルマ、ニ

三卷_{卅五} 二_丁 物部_{モノベ}乃_ノ臣_{オミ}之_ノ壯士_{ヲトコ}者_ハ大王_{オホキミ}任_{マケ}乃_ノ隨_{マニ}意_ノ聞_キ跡_ト云_フ物
曾_ソとあるハオホセ付_ラレルマ、ニと云意_ハなり。十七_丁
二_丁 安麻射_{アサガ}加流_{カール}比奈_{ヒナ}乎_ヲ佐米_{サメ}尔_ニ等_ト大王_{オホキミ}能_ノ麻氣_{マケ}乃_ノ麻_マ尔_ニ末_マ尔_ニ
出_{イデ}而_テ許_{コシ}之_シ云くとあるハサシタテ_ラレルマ、ニと云意
なり。

まこと_{マコト}又_{マタ}ホシニ_ニナル_{ナル}ホド_{ホド}シヤウ_{シヤウ}ジシ_{ジシ}オ、ソレヨ_{レヨ}外_{ガイ}
七卷_{卅四} 二_丁 淡海_{アヲ}之_ノ哉_ヤ八橋_{ヤハシ}乃_ノ小竹_{コタケ}乎_ヲ不_ヤ造_{ハカ}矢_ズ而_テ信_{コト}有_{アリ}得_ユ哉_ヤ
戀_{コヒ}敷_{シキ}鬼_{オニ}乎_ヲとあるハ俗_{ソコ}ハホシニ_ニアラ_レヤウ_カと云意_ハ
り十五_丁 二_丁 於_オ毛波_{モハ}受_ズ母_モ麻_マ許_{コト}等_ト安里_{アサリ}夜_ユ牟_ム也_ヤ左_サ奴_ヌ流_ル欲_ヨ
能_ノ伊_イ米_メ尔_ニ毛_モ伊_イ母_モ我_ガ美_ミ延_エ射_ガ良_ラ奈_ナ久_ク尔_ニとあるも同_ト七卷

四十丁。世間者信二代者不往有之過妹尔不相念者とあるハカ子テ世間ハ二代行ト云コトノナイモノヂヤトハ聞テ居タケレド正真ニサヤウノコトモアルカシラ又ト不信用テ居タガセシタツテ死ンダ女房ニニタビヨウアハヌニテ思ヘバナルホドキイタトホリ二代ハイカヌモノデアアルワイと云意なり四卷一丁。吾念如此而不有者玉二毛我真毛妹之手二所纏牟とあるハ正真ニの意なり八卷丁。聞津哉登妹之間勢流雁鳴者真毛遠雲隱奈利とあるハナルホドともシヤウジンとも譯すべし又オツレヨとも譯すべし

まさきく 息災大王 磐石乃濱松之枝乎引結真幸有者亦還見六二卷丁。磐石乃濱松之枝乎引結真幸有者亦還見六とあるハ息災デアアルナラと云意なり十三丁。言幸真福座跡恙無福座者荒磯浪有毛見登云々志貴島倭國者事靈之所佐國叙真福在與具廿卷丁。安騰母比豆許藝由久伎美波奈美乃間乎伊由伎佐具久美麻佐吉又母波夜久伊多里豆云々るとあるみな同ト
まさか イソノバ サシアタツタトキ
十一丁。白香付木綿者花物事社者何時之真坂毛常不所忘とあるハソノバデモイツモ忘ラレルト云コ

トハナイ、常ニオモハレルト云意なり。十二十六、丁、梓弓。
末師不知、雖然真坂者君尔、縁西物乎とあるハ、末カケテ
ノコトマデハシラ子ドモ、只今サシアタツ夕時ハと云
意なり。

ましウ

有麻斯ハアラウ、無良麻斯ハナカラウと云意なり。

ます○いままゴザル

六卷廿八、天尔座、月讀壯子、幣者將為、今夜之長者、五百
夜繼許曾とあるハ、俗ニ天ニゴザルと云意なり。五卷七
都智奈良婆大王伊麻周云くとある伊麻周も、同じこ

とあり、言ハ散了留もささり

ませて○いませ、招待シテ、意ハ、出らる言さし、思

七卷廿六、住吉波豆麻君之、馬乘衣雜豆臘、漢女乎座而

縫衣叙十六十三、千磐破神尔毛莫負ト部座、龜毛莫燒

曾云くなどあるハ、俗ニ招待シテと云意なり。十二十八

十五日、出之月乃高、尔君乎座而、何物乎加將念とあ

る、伊麻世氏も同ト、言ハ散了留もささり

ましきマヘカドマダソノ時分デモナイ

十九廿五、遥く尔鳴、霍公鳥、吾屋戸能殖、木橘、花尔知流、
時乎麻多之美、伎奈加奈久曾許波不怨云くとある、時乎

招マダシハ非優ヒユウのをき
 てもと神カミ小コまれ
 人ヒトはまれその居イ處
 を立タて此方コノカタは招マダシき
 致イダシらむるを云イふ
 となりその招マダシき致イダシ
 らむるよハ或シハ
 樂ヲクまきこと或シハ
 笑ヲウまきことなど
 をしてそれ愛ミて
 此方コノカタより來キべき
 志シをすること
 なりされバをの
 くをのノきさると云
 詞コトも或シハ樂ヲクまきこ
 と或シハ笑ヲウまきこ
 と云イてそのもとハ
 招マダシと云言イを活用カクか
 して云イること見
 えりこの例コトよ

麻多マダシ之美ミハマダ時節トキノセガマヘカドナユエニ或シハマダソ
 ノ時分トキノヘデモナイユエニと云意イなり古今集コノイミ五月來イツキノキバ
 鳴ナりふりなむほとゝぎにまこときほどの聲コエを聞キむや
 とあるもマダソノ時分トキノヘニナラズマヘカドノウチニ聲コエ
 ガ聞キタイとの意イなり按シマダシ之ノ伎キハ伊麻陀イマダ之ノ伎キの伊イ
 を省シきとる言コトと思オモふハひの言コトなり伊麻陀イマダハ陀ダの言コト濁ダク
 伊麻多イマダシ之ノ伎キハ多タの言コト清スてもとより各別オノオノなり後世ノチノヨ必カナラ伊イ
 麻陀イマダと云イべき所トコロを麻陀イマダと云イることあれど古コノハなきこ
 ととなりそもく麻多イマダシ之ノ伎キハ待意マツイより出デる言コトなりと思オモ
 へるれば多タの言コトハ必清カナラて唱ナゲべきことなり

りて考カウるに待マツをも
 まこと活用カクい
 へりときこせり

まどす 御待被成ミマツシヤル
 五卷イテ廿九ニ出立イデテ由伎斯ユキシ日乎ヒヲ可俗閑都カソクワンツ家布ケフ等阿トア
 袁麻多周良武知エンマダスラムチ波ハ良波母ラハモとあるハ吾ワヲ御待ミマツナサ
 レルデアラウ或シハ吾ワヲマツシヤルデアラウと云意イ
 なり
 まづ 一イチバンニ 一イチバンカケニ
 十卷トウ十三ニ春去ハルセバ先三枝サキクサ幸命サキクアラバ在後相イノチモ莫戀ナモヒ吾妹ワキモ又マタ十八ニ春
 去者サレバ先鳴鳥サキナクトリ乃ノ鷲ウケヒス之ノ事コト先立サキダチ之ノ君乎キミヲ之ノ將待マクマ又マタ六十ニ梅花ウツクハナ先
 開杖手折而者サクエダテヨリテハ裏常名付而ウラトコトナツケテ與副手六香聞ヨソヘテムカカモ廿卷ニ九ニ保
 等登藝トキ須麻豆奈久安佐氣伊可尔世婆スマヅナクアサケイカニセバ和我加度須疑自ワカカドスズギジ

古言譯通冬

可多利都具麻塗などある麻豆ハ俗よ一バンニ或ハ一
バンガケニと云意なり。

まつろ ケンジーヤウスル

一卷十九 山神乃奉御調等春部者花插頭持秋立者黄
葉加射之云十六 高杯尔盛机尔立而母尔奉都
也目豆兒乃負父尔獻都也身女兒乃負などあるハ常よ
ケンジーヤウスルと云意なり。

まなかひ 目ノサキ

五卷八 宇利波米婆胡藤母意母保由久利波米婆麻斯
提斯農波由伊豆久欲利枳多利斯物能曾麻奈迦比尔母

等奈可利提夜周伊斯奈佐奴とあるハ眼之交の義よ
て俗よ目ノサキと云よ同ト。

まねく シゲウ タビク サイク 數多ウ タント

二卷 真根久往者人應知云くとあるハシゲウニ
イカバともタビクイカバともサイクイカバともいふ
意よきこえと四卷 如夢所念鴨愛八師君之使
乃麻祢久通者とあるも全同ト一卷 浦佐夫流情
佐麻祢之久堅乃天之四具礼能流相見者とあるハ佐ハ
そへとる言よてニガクシイコ、ロガシゲウナツタと
云意なるべト二卷 日月之數多成塗十七

多^タ麻^マ保^ホ許^コ能^ノ美^ミ知^チ尔^ニ伊^イ泥^デ多^タ知^チ和^ワ可^カ礼^レ奈^ナ婆^バ見^ミ奴^ヌ日^ヒ佐^サ麻^マ祢^チ
美^ミ孤^コ悲^ヒ思^シ家^ケ武^ム可^カ母^モ又^又六^六丁^丁矢^ヤ形^{カタ}尾^ヲ能^ノ多^タ可^カ乎^ハ手^テ尔^ニ湏^ス惠^エ美^ミ
之^シ麻^マ野^ノ尔^ニ可^カ良^ラ奴^ヌ日^ヒ麻^マ祢^チ久^ク都^ツ奇^キ曾^ソ倍^ヘ尔^ニ家^ケ流^ル十^十八^八丁^丁月^{ツキ}
可^カ佐^サ祢^チ美^ミ奴^ヌ日^ヒ佐^サ末^マ祢^チ美^ミ故^コ敷^フ流^ル曾^ソ良^ラ夜^ヤ湏^ス久^ク之^シ安^ア良^ラ祢^チ婆^バ
十^十九^九丁^丁六^六丁^丁朝^{アサ}暮^{ユキ}尔^ニ不^キ聞^ク日^ヒ麻^マ祢^チ久^ク安^ア麻^マ射^サ可^カ流^ル夷^ヒ尔^ニ之^シ居^ル
者^バ又^又三^三丁^丁都^ツ礼^レ母^モ奈^ナ久^ク可^カ礼^レ尔^ニ之^シ毛^モ能^ノ登^ト人^{ヒト}者^ハ雖^イ云^フ不^キ相^ア日^ヒ
麻^マ祢^チ美^ミ念^ネ曾^ソ吾^ワ為^ス流^ルこれらハ日^ヒ數^ス多^クイ^ト云^フ意^ハなり俗^ノよ
タ^タントといふよもあされり。

まひ ケンジヤウモノ

五^五卷^卷四^四丁^丁和^ワ可^カ家^ケ礼^レ婆^バ道^{ミチ}行^キ之^シ良^ラ士^シ末^マ比^ヒ波^ハ世^セ武^ム之^シ多^タ敝^ヘ

乃^ノ使^シ於^テ比^ヒ豆^ト登^ト保^ホ良^ラ世^セ六^六卷^卷八^八丁^丁天^{アメ}尔^ニ座^ス月^{ツク}讀^ク壯^{トウ}子^コ幣^ヒ者^ハ
將^セ為^ム今^{イマ}夜^ヨ乃^ノ長^{ナガ}者^サ五^五百^百夜^ヨ繼^{ツギ}許^コ曾^ソ九^九卷^卷二^二丁^丁霍^{ホト}公^{トウ}鳥^{トウ}を^{マヒ}幣^ヒ
者^ハ將^セ為^ム遐^{トホ}莫^ク去^ク十^十七^七丁^丁多^タ麻^マ保^ホ許^コ能^ノ美^ミ知^チ尔^ニ可^カ未^ミ多^タ知^チ
麻^マ比^ヒ波^ハ勢^セ牟^ム安^ア賀^ガ於^テ毛^モ布^フ伎^キ美^ミ乎^ハ奈^ナ都^ツ可^カ之^シ美^ミ勢^セ余^ヨ廿^ニ卷^卷四^四
五^五丁^丁和^ワ我^ガ夜^ヤ度^ド尔^ニ佐^サ家^ケ流^ル奈^ナ豆^ト之^シ故^コ麻^マ比^ヒ波^ハ勢^セ牟^ム由^ユ米^メ波^ハ奈^ナ
知^チ流^ル奈^ナ伊^イ也^ヤ乎^ハ知^チ尔^ニ左^サ家^ケな^ハとある麻^マ比^ヒハ麻^マ比^ヒ奈^ナ比^ヒよて
俗^ノ云^フ献^{ケン}上^{ジョウ}物^{モノ}なり賄^ウ賂^ロの字^ジ義^ギをのみ云^フハ後^ノのことよて
其^レ鏡^{キョウ}梓^シの類^{ルイ}をを^トめて絹^{キヌ}布^フ或^ハ毛^モの麁^ア物^{モノ}毛^モの和^ワ物^{モノ}
鱈^カの廣^{ヒロ}物^{モノ}鱈^カの狹^{キマ}物^{モノ}甘^{カン}菜^{サイ}辛^{シン}菜^{サイ}などよ至^{ツキ}るまで神^{カミ}よ供^クる
物^{モノ}をさして云^フをを^トめて何^ニよまれ尊^{ソウ}者^{シャ}よ献^{ケン}るものを

古言譯通冬

十

云ことなり。

まみ 〓 メモト

七卷二十丁。大舟オホフネ乎ヲ荒海アラウミ尔ニ擲出ヒキダシ八船ヤチタケ多氣タケ吾見ワカ之シ兒等コラ之ガ目見者メミ知之シル母モとあるハ目モトニソレトアラハレタと云なるべし。

まむ 〓 マウ

將住スマムハスマウ。將讀ヨムムハヨマウ。將忌イムムハイマウ。將惜ヲシムムハヲシマウと云意なり。

まよふ 〓 衣ノ織目ノヨル 〓 衣ノ縫目ノヨル

七卷二十丁。今年コトシ去ユク新島ニヒシマ守モリ之ガ麻衣アサヒ肩カタク乃間乱者マヨヒハタレカトリ許誰取見

とある間乱マヨヒハ衣ノ織目オリ或ハ縫目ヌイノヨルをいふ集中シウジュウ。袖スエビハまよひぬとも袂タビノ行麻ウラマ欲比ヨヒ來キよけり。とよめるなごみれ同ト。

まをす 〓 まろを 〓 言上スル 〓 ヒキウケテトリマカナウ

十一丁。新室ニヒムラ踏静子フミシヅコ之ノ手玉テタマ鳴裳ナラシ玉如タマゴト所照公乎ソリタルキミ内等ウチヘト白シラ世セとあるハ内へ御入被成ミコトヨト言上セヨトといふおどの意なり。古事記仁徳天皇條。夜麻志呂能ヤマシロノ都ツ紀能美キノミ夜迹母能ヤニモノ麻袁須マヲス阿賀勢能アガセノ伎美波キミハ那美多具麻之母ナミタグマノモ雄畧ヲシ天皇御歌。美延斯怒能ミエシノ袁牟漏賀多氣ヲムロガタケ尔ニ志斯布須登多シスフストタ礼曾意富麻幣尔レソノオホマハニ麻袁須マヲス云くなどある。麻袁須ハみふ尊

所_レ對_レて告_レことよて、俗_ニ言_ハ上_ルスルといふよあされり、
志_ハあるを後_ニ世_ニ尊_キ方_ニ對_レて言_ハことを申_スといふはよ
けれども、賤_キ方_ニも對_ヒていふこと、心得_テ申_聞申_シ
付_レなどさへいふえ、いごとくおへることなり。○二卷_三
五_丁、八隅_ハ知之_、吾_ハ大王_之天下_ニ申_賜者_、云_クとあるハ、天皇
の敷_座天下_ノ大_政を高_市皇子_ノ尊_ノの執_申給_ハバと云
なり。五卷_一三_丁、天下_ニ奏_多麻_比志_、家_子等_撰多_麻比_天云
云とあるも同_ト、又十九_丁、古_昔尔_君之_三代_經仕_家
利_吾大王_波七_世申_祢これら皆_申ハ執_申すことよて、俗
よヒキウケテトリマカナウといふ意_{ナリ}、又十八_丁

一、保_里江_欲里_水乎_妣吉_之都_追美_布祢_左須_之津_乎能_登
母_波加_波能_瀬麻_宇勢_とあるも、ヒキウケトリマカナウ
テ、河_瀬ニ御_舟ノ難_マ又ヤウニ仕_奉との意_よて、これ_も
天下_申といふ申_と同_言なり。○五卷_一三_丁、諸_能大_御神
等_船舳_尔道_引麻_遠志_云くとあるハ、今_世も尊_キ方_ニ
對_ヒて、御_教へ申_す、御_習ひ申_をなどいふ申_と同_ト意_ニ
きこえたり、これ_も也_と、天下_申の申_{より}轉_レるなるべ
し。

○み部

み
ミヨ
ミヤレ

一卷十六 二、淋人乃良跡吉見而好常言師芳野吉見與良人四來三とあるハ、ヨウミヨ、あるハヨウミヤレと云意なり。

み
サニ
イユエニ
ツテ
ンデ
ウ
イ物ニ

カラウトテ
ンデアル間
イ
モシ
タリ

一卷十五 二、空蟬之命乎惜美浪尔所濕伊良虞能島之玉藻川食とあるハ、命ガ惜サニ、或ハ命ガ惜イユエニと云意なり。二卷廿 二、青駒之足搔乎速雲居曾妹之當乎過而來計類とあるハ、足搔ガハヤサニ、或ハアガキガハヤイユエニと云意なり。この集中ニことニ甚多ト、又上ノ乎

と云辞のなきも同トことなり。一卷二十 二、暮相而朝面無美隠尔加氣長妹之廬利為里計武とあるハ、朝面無サニ、或ハナイユエニと云意なり。三卷三十 二、越海乃手結之浦矣、客為而見者之見、日本思櫃とあるハ、見レバ乏シサニ、或ハ乏シイユエニと云意なり。かやうノ乎の辞の上ノなきも集中ニ甚多ト、准へて知べト、又云、美等とつゞけさるも甚多ト、又云、美可、云、美也、云、美許曾、云、美叙、るど種ト、連ね云、り、皆美と云辞の意ハ異れることなり。○一卷二十 二、天皇乃御命畏美柔備尔之家乎擇、云、とあるハ、御命ヲカシコマツテ、或ハ御命ヲ

カシコ^ンデなどいそむが如し。これも集中よいと多き
つゞけなり。ま^{カシコ}と畏美等といへるも同意なり。○四卷^{三十}
丁^二。吾妹^{ワギモ}兒^コ矣^ア。相^{アヒ}令^シ知^{ヒト}人^ヲ乎^{コソ}許^ツ曾^{コヒ}戀^ノ之^ガ益^バ者^ハ恨^{ウラメシ}三^ニ念^キとある
也^ニ。ウラメシウオモへと云意なり。十一^三丁^十。眉^{マヨ}根^チ搔^{カキ}下^{シタ}
言^{イフ}借^{カシ}見^ミ思^{オモ}有^{ハレ}尔^ニ去^{イニシ}家^ヘ人^ヲ乎^{アヒ}相^{アヒ}見^ミ鶴^{ツル}鴨^{カモ}とあるハ。裏^{シメ}イフカシ
ウと云意なり。集中よ甚多し。伊勢物語よいそぬふみか
さなる山ハへごてぬどあそぬ日おやくこひりさるあ
なとある也。十一^七丁^二。石^{イハ}根^チ踏^{フミ}重^ヘ成^{タル}山^{アラ}雖^{チドモ}不^{アハ}有^マ不^ヒ相^ヒ日^ニ數^ニ戀^{コヒ}
度^{ワケル}鴨^{カモ}とあるを。つくりうへさるものなり。さてあそぬ日
ねをみといそべして。ねやくと云るは。あそぬ日ねやく

戀しくと思ふよしの歌よして。かの物語をつくれるが
ゆゑなり。志^シのれども。ねをみハ。オホサニとも。オホウと
も。譯^ツさる。詞^{コト}のさごまりなれむ。いづれの意よとりて
も。ねをみとこそいふべきことなるに。ねほくと云るハ。
か此頃ねをみと云てハ。オホウと云意よなることをう
しなひさるがゆゑよ。あらむかやうのどころを。ねほ
くとやうよ云て。いさくつさなくきこゆることなる
をや。○四卷^{三十}丁^八。絶^タ常^ト云^ハ者^ハ和^ワ備^ビ漆^シ責^{セム}跡^ト燒^キ太^タ刀^ノ乃^チ隔^ヘ付^{ツカ}
經^ツ事^{コト}者^ハ幸^{カシヤ}也^ニ。吾^ワ君^{キミ}とあるハ。ワビシイ物ニセウトテ。と云
意なり。十二^{二十}九^九丁^丁。相^{アヒ}見^ミ欲^{ホリ}為^ス者^ハ從^ス君^{キミ}毛^モ。吾^ワ曾^ソ益^{マシ}而^{シテ}伊^イ布^フ可^カ

思美為也とあるハ、イフカシイ物ニスルと云意なり。同
卷四十丁下。白妙乃袖之別乎。難見為而荒津之濱屋取為鴨
とあるハ、難イ物ニシテと云意なり。この美ハ、後世言ハ、
重んずるなど云んと同言ハ、其も本ハ、重んずる。輕ん
ずると云詞の類れざるものなり。その重んずる。輕んず
るなど云も、重イ物ニスル。輕イ物ニスルといふ意なる
よ准へて、をべてを辨べ。○三卷三十丁下。不見而往者。益
而戀石見云とあるハ、益テ戀シカラウトテと云意な
り。同卷四十丁下。足日木能石根許其思美管根乎引者難三
等標耳曾結焉。四卷二十丁下。今夜之早開者為便乎無美秋

百夜乎願鶴鴨などある同トことよて、未來をかけてい
へる詞なり。古來此用様の意を辨へざる人なくして、一
首の大概を誤るること多ト。○八卷二十丁下。夏野乃繁
見丹開有姫由理乃不所知戀者苦物乎とあるハ、繁ニテ
アル間ニといふ意なり。十七二十丁下。波流乃野能之氣美
登妣久く鷺音太尔伎加受云。十九二十丁下。暮左礼婆藤
之繁美丹云くなどある。みな同ト。○十一三十丁下。泊瀬川
速見早湍乎結上而不飽八妹登問師公羽裳とあるハ、速
イ早湍をと云意なり。此例集中外ニ見えざる所なり。尤
めづらしき用ひ様なり。金槐集ニ君が代ニ猶長らへて

月清み秋の御空此影を待らむとある美ハ用ひさま同
 ことあり○三卷六十雄自毛能負見抱見云くとあ
 るハ負モシ抱モシ或ハ負タリ抱タリと云意なり十一
 二十波祢纒今為妹之浦若見咲見愠見著四紐解又十
 六梓弓引見弛見云く十二十六梓弓引見縦見云く十
 六八三名之綿蚊黒為髮尾信櫛持於是蚊寸垂取束舉
 而裳纏見云く十八二十波之吉余之曾能都末能古等
 安沙余比尔惠美く惠末湏毛云く又二十乎登女良尔都
 刀尔母夜里美之路多倍能蘇泥尔毛古伎礼香具播之美
 於枳豆可良之美云く新撰萬葉不飽芝手君緒戀鶴淚

許曾浮杵見沈箕手有直都礼古今六帖逢事ハるよ
 の池此水なれや絶み絶すみ年の経ねらむ伊勢集よこ
 するをあひみあををみかけきけむ人のうへこそ我
 身なりけれ後撰集よ十月降み降むみさごめなき志く
 れぞ冬の初るりけるなどあるみれ同ト猶後くよ甚多
 き言なり

みろほーミタイ
 六卷四十山見者山裳見貌石里見者里裳住吉云くと
 ある見貌石ハ見之欲めて見タイと云よあされり
 みことハはさず御意不被成

靈異記上、大和國宇多郡漆部里有風流女云、天年風聲為行云、彼氣調恰

二卷 二十 八丁 明言^{アサト}爾^ニ御言^{コト}不^ハ御問^ハ云^クとあるハ、御意不被成と云意なり。

みさを キヤシヤ

四卷 四十 九丁 足引^{アシヒキ}乃^ノ山^{ヤマ}尔^ニ四^シ居^イ者^者風流^{フウリウ}無^ク三^三吾^{アガ}為^セ流^レ和^ワ射^サ乎^ハ。害目^{トガメ}賜^{タマ}名^ナとあるハ、山分^{ヤマワケ}デハ、諸事^{シヨウジ}ブコツナコトデヤニ

ヨツテ、キヤシヤニハナク候ヘドモ、ワタクシノカヤウニ仕リマシタ事ヲ、御難シ不被遊ニ御覽ジテ、御心ヲ御ナグサメ被遊ヨと云意なるべし。此ハ山邊より、何物もまれ献るとてよめるなるべし。風流ハ、靈異記ニ、風流、風聲三左乎、まゝ氣調^{キキウ}弥^ミ佐^サ乎^ハなどあり。字書ニ、操、節操、又、拾、風調曰操とあり。

如天上客云く

古事記雄略天皇條、引田部赤猪子、ことを然汝守志待、命徒過盛年是其愛、悲云く、古訓古事記

遺集^二、三瀬川渡る美佐^{ミサ}乎^ハもなるありけり、何小衣をぬきてのへらむ、中右記ニ、寛治八年八月十九日、今夜、大殿、於賀陽院有哥合興、是依永承例、女房與男房為讀人云く、寢殿、巽角東面、戸前、立切燈臺二本、無風云くとあるも、花車風流、装飾れることなり、と云義ふや。

みさく ミハラス

一卷 十三 丁 數^{シバク}く毛^モ見^ミ放^{サカ}武^ム八^ヤ方^マ雄^ヲ云くとあるハ、見ハラスバキ山^{ヤマ}チヤニと云意なり。三卷 五十 丁 去^{ユラ}左^サ尔^ニ波^ハ二^ニ吾^{アガ}見^ミ之^シ此^{コノ}埒^{サキ}乎^ハ、獨過者^{ヒトリスレバ}情^{ココロ}悲^{カナシ}哀^モ一^ニ云^フ見^ミ毛^モ左^サ可^カ受^ズ伎^キ濃^ノとある也、ミハラシモセズニキタといふ意なり、をべて放ハ、遠

く見をらすを云。振放見など云るよて知べし。

みさご ビシーヤゴ

三卷 四十丁。美沙居石轉尔生名乘藻乃名者告為豆余親

者知友十一丁。水沙兒居奥鹿磯尔縁浪往方毛不知

吾戀久波などなわあり。三佐兒とも書り。今俗よビシ

ヤゴといふ鳥なり。

みちもせに 道一ッパイニ

せ部よ出。

みちもり ミチバン

四卷 三十一丁。吾背子之往乃万く將追跡者千遍雖念手嬾

女吾身之有者道守之將問答乎言將遣為便乎不知跡立

而爪衝とある道守ハミチバンと云が如し。

みつる オトロヘヤツレル

四卷 四十丁。丈夫跡念流吾乎如此許三礼二見津礼片思

男責とあるハ甚シウオトロヘヤツレテモコノヤウニ

片思ヲシテサアラウカヤと云意なり。十卷一丁。香細

寸花橘乎玉貫將送妹者三礼而毛有香とあるも同。日

本紀。羸字をミツルとよめり。

みづはあ 水ノデバナ

十九 九丁。宇能花乎令腐霖雨之始水逝縁木積成將因

兒毛我母とあるハ、契沖、俗よ水ノデバナといふも同ト
といへり。

みつば 水ノアワツブ

廿卷五十五丁、美都煩奈須可礼流身曾等波之礼、杼母奈
保之祢我比都知等世能伊乃知乎、とある美都煩ハ、水粒
よて、水ノアワツブのことあり。

みなぎし 三テナグサンダ

十九十八丁、和我勢故等、手携而曉來者、出立向暮去者、振
放見都追念暢見奈疑之山尔、云くとあるハ、相共ニ見テ
慰ンダ其山ニ云くと云意なり。

みね ぜツテウ

峯嶺等の字を美祢と訓也、今俗よ云ぜツテウのことな
り。

みねもせに ぜツテウ一ッパイニ

せ部考合べし。

みまし ソナタ

伊麻之といふも同ト、古言よ、汝を伊麻之とも、美麻之と
もいへり、い部考合べし。

みむ ミヨウ

將並と云ハナミヨウ、將恨と云ハウラミヨウと俗よ云

よ同じ。

みやこび ミヤコメキ

三卷 二十 六丁 昔者社難波居中跡所言奚米今者京引都備

仁鷄里 引ハ利字の誤 とあるハ都メイタワイと云意あり

り

みる オモウ

二卷 四十 四丁 春野燒野火登見左右燎火乎何如問者云く

とあるハ野火ヂヤト思フマデと云意あり。

○む部

む ウツメル

來武行武などあるハカウイカウと云意なれば武を俗

よウと云よあされり 十九 十七 二 霍公鳥今來喧曾無

葛蒲可都良久麻泥尔加流く日安良米也とあるハ來テ

鳴ッメルといふことなり。

む マヘカタ

三卷 二十 六丁 昔者社難波居中跡所言奚米今者京引都備

仁鷄里 又二十 七丁 昔見之象乃小河乎今見者弥清成尔來鴨

又 五十 七丁 昔許曾外尔毛見之加吾妹子之奥榔常念者波之

吉佐寶山などある昔ハみなマヘカタといふことなり。

む ホンモウ

十八ニ四十丁二思シ良ラ多タ麻マ能ノ伊イ保ホ都ツ度ド比ヒ乎ヲ手テ尔ニ牟ム湏ス妣ビ於オ
許コ世セ牟ム安ア麻マ波ハ牟ム賀カ思シ久ク母モ安ア流ル香カとあるハオビタ、シ
イ白玉ヲトツテ吾方ニオコサン漁夫ハホンモウデモ
アル哉と云り延喜六年日本紀竟宴歌云伊佐袁志久多
陀斯岐淤知乃於牟迦斯佐斗豆曾和我那毛岐微波多末
比斯とあるもイソシウタバシイ道ガホンモウチヤト
テ吾名ヲツカハサレタと謂なり抑牟加思とハ向ムカ一
て何にまれ心ココロニ協カチひて喜ウレ一きこととて其方ムカニ向ムカむる
るより云ることあり於牟迦斯ハ面向オモムカ一とてこれ右
と同意なるら牟加斯を今少イマコト云イハす云イハす方ムカなり

と知べし。命幸入五戸漸垂冰以手執鬚緒者
むけのまに歸服サセルマニニ
十八ニ一十丁二毛モ能ノ乃フ布フ能ノ八ヤ十ソ伴ト雄モ乎ヲ麻マ都ツ呂ロ倍ヘ乃ノ牟ム氣ケ乃ノ
麻マ尔ニ老オ人ヒト毛モ女メ童ワ兒ラ毛モ之シ我ガ願ネ心ココロ太タ良ラ比ヒ尔ニ撫ナ賜タ治ツ賜タ
婆バ云クとある牟氣ハ言歸コトハクの牟氣ムケとて令歸シムカの縮シとる
なり即歸服サセルマニニと云意なり天皇の天下萬民
を惠み撫賜ふハ服従マツひ歸オモムき化オツカ一むる大御オホミとざるハバ
かくていへり
むをハエル
一卷十五丁十五河上カハカミ乃湯津磐村ノユヅイハムラ二草武左受常丹毛ニクササムササズニモガモナトコ冀名常

處女煮手三卷十六。香山之銚耜之本。爾薛生左右二十
 三。甘嘗備乃三諸乃神之帶。為明日香之河之水尾速
 生多米難石枕蘿生左右二。云くなどありて。武須ハハエ
 ルと云ことあり。日本紀。皇産靈此云美武須毘とあり
 て。武須。産字をあてられ。常。武須子。武須女。など云武
 須も同じ。後世ハ苔のみ。むすといへども。古ハ志あら
 ば。何よまれ。自生出るを云る言あり。
 むきぶ。スクヒアゲル
 十一。泊瀬川。速見早湍乎。結上而不飽。八妹登問師
 公羽裳七卷。命幸久在石流垂水乎。結飲都ちと

ある。これらの結ハ。スクヒアゲルといふことなり。
 二卷。浪之共。彼縁此依。玉藻成依宿之妹乎。云く。又
 冬木成春去來者。野每着而有火之風之共。靡如久
 云く。八卷。霍公鳥來鳴令響。宇乃花能共也。來之登
 問麻思物乎。などある共ハ。トモニといふことあり。
 むなこと。ウソ。イヒナシ。無實ナコト
 十一。朝茅原。小野印空事。何在云。公待とある。事ハ借
 字。十二。空言とある字。意なり。イカナルワケチヤ
 小人ニウソツイテ。君ヲバマタウヤラと云るなり。廿卷

五十丁 二、牟奈許等母於夜乃名多都奈とあるも、イヒナシ
ニモ、或ハ無實ナコトニモ、先祖ノ名ヲタヤスナとなり。
むろ ○むれ メル

定牟流ハサダメル、留流ハトメル、漆流ソメルなど、俗
まいふよ同じ、牟礼も、許曾のか、此結の異なるのみ
にて、譯言ハ同じ。

○め部

め スガタ
十五丁 五、由布佐礼婆比具良之伎奈久伊故麻山古延互
曾安我久流伊毛我目乎保里とあるハ、妹ガ容儀ノ見タ

サニと云意なり、君之目ハ君ガ容儀、汝目ハ汝ガ容儀な
るよ、いづれも准べし、彼方ノ容儀ハ此方ノ所見なれば、
米と云るなり、美延ハ米よ縮まれり、君之目、妹之目など
云ハ、君妹ノ目口ノ目を云るよハ非に。

めろれ メバナシ

三卷 二十丁 二、佐保過而寧樂乃手祭置幣者、妹乎目不離相
見、漆跡衣とあるハ、妹ヲメバナシセズニ、見セシメタマ
ヘトテゾと云意なり、目離とハ、見る事のかれ行よしな
ハ、本草ノ枯と云も、生氣ノ離るよしよても、同言あり、
人目も草もかれぬと思へむ、るど後よもいへり。

めぐ、ムゴラシウ

十一丁十九 人毛無古郷尔有人乎。愍久也。君之戀尔令死

とあるハ、吾ヲ戀死ニ死ナセウトスルハ、ムゴラシイコ

ト哉とるリ、四卷八丁、都礼毛無將有人乎。獨念尔吾念

者。惑毛安流香とあるも、惑ハ愍字の寫誤にて、メグシク

モアルカなるべきまや。

めぐ、カハイラシイ

九卷二十丁、他妻尔吾毛交牟。吾妻尔他毛言問云く、今日

耳者目串毛勿見事毛咎莫とあるハ、ジブンノ女房ヂヤ

ト云元ヌダンノヤウニカハイラシウバツカリ思フ大

人ニ交トテモトガメルナと云意なるべし。十八丁、

父母乎見波多布刀久妻子見婆可奈之。久米具之とある

も同丁十七丁、妹毛吾毛許己。呂波於夜自多具弊礼

登伊夜奈都可之。久相見婆登許波都波奈尔情具之。眼具

之母奈之尔云くとあるハ、眼ぐしく無と云意ハ非僅

奈之尔ハ切なることを切なきと云怪しかることを怪

しからぬと云ごとく意得べし。されバこれも眼具之と

云るよ同ト。

めこと、ミルコトイフコト

二卷三丁、飛鳥云く、味澤經目辞毛絶奴云くとあるハ、

目辞といハ目と辞との二を云て、三ルコトモイフコトモ
絶々といふなり。目ハ見る事。辞ハいふ事なり。四卷四丁
海山毛隔莫國奈何鴨目言乎谷裳幾許之寸ともあり。
同意あり。

めをゴランジルゴラウジルアガル

一卷二丁食國乎賣之賜牟登云くとあるハ御覽ジア
ソバサレウトテと云意なり。三卷五丁波之吉可聞皇
子之命乃安里我欲比見之活道乃路者荒尔鷄里とある
御覽ジタ活道ハ路ハアレタワイと云意なり。十九三
九丁八隅知之吾大皇秋花之我色く尔見賜明米多麻比

云く秋時花種尔有茶色别尔見之明良牟流今日之貴左
廿卷五丁母能其等尔佐可由流等伎登賣之多麻比安
伎良米多麻比云く又六丁波布久受能多要受之努波牟
於保吉美能賣之思野邊尔波之米由布倍之母ちとある
みな同上○八卷二丁戲奴之為吾手母須麻尔春野尔
拔流茅花曾御食而肥座とあるハアガツテ御肥大サリ
マセと云意あり。十六三丁石麻呂尔吾物申夏瘦尔吉
跡云物曾武奈伎取食賣世反也とあるハ鱸ヲ漁テアガリマ
セと云意なり。そむく賣須とハ尊者の見給ふことをさ
ど見須と云又所聞見須所知見須など云見須も見給

ふと云謂なり。又尊者の前へ親く呼寄ることをも云て。集中も、召事毛無。或ハ召而使之などやう云。又今世も、常然云ことなり。これも眼前見給ふ意よりいへるなり。さてそれより轉じて、必見ることならでも、親く身小受入ることを尊みて、食ことなどよも云るなり。則、飯を賣之と云もそれなり。これも尊者の食物をさふとみていへるが、たのづから轉じて、食物をなべていふ稱のごとくなれるなり。又船を、馬にめすなどやう云も、同トことの轉れるまで、みちそのもとハ、見る意よつきていへるなり。尊者の間給ふことを、所聞といふこ

○とい常なるを、それより轉じて、酒など飲給ふことをも、伎己酒といふと、全同トことなり。

めむ、メヨウ

將止と云ハ、ヤメヨウ。將留と云ハ、トメヨウと俗ニ云ハ

同ト。

めり○める○めれ、オモハレル、ヤウニオモハレル

サウオモハレル

勝賣利ハ、カツヤウニオモハレルといふ意なり。をべて

云く賣利と云ハ、云くノヤウニオモハレル。或ハサウオ

モハレルと云意なり。但此詞、十四東歌ニ、一ツあるのみ

て古語よをさく見えぬことなり。賣留賣礼も上のか
かどふよりて結の異なるのみよて譯言ハ同トことな
り。

めり○めろ○めれ ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

清有ハスンダ或ハスンデアルといふ意なり。霞有ハカ
スンダ或ハカスンデアルといふ意なり。漆有ハソ
ンダ或ハソンデアル又ハソウダ或ハソウデアルといふ意
なり。賣留賣礼も上のか、どふよりて結詞の異なるの
みよて譯言ハ同トことなり。

十二ニハ丁トよ小竹之上ノウヘ尔ニ來居キテ而鳴鳥ナリ目乎安見メヲヤスミ人妻ヒトメ妬尔ニ
吾戀アハレ二來ニとあるハ見惡ミカカラズ見ヨミイユエニ或ハ見ヨ
サニと云意なり。目安ハ見惡ミカの反よて愛賞ウツクシをること
にいへり。難見の反よて易見意ハあらず。源氏物語桐
壺よ更衣の事をさまのちらなどのめでさる事こと
心むせの柔和オダラカよ目安く惡み難かりし事など今ぞたが
し出る云々とあるも愛賞する方よ云るよて同意なり。

○も部

も ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

一卷トよニ熨田津尔ニ船乘世武登月待者バシホモ潮毛可奈比沼今

者許藝豆菜とあるハ月ノ出ルヲ待テアルニ月ノ三十
ラズ潮モマタミチ來テ御舟ヲ出スニ時ガカナウタと
云意なり○一卷十一ノ君之齒母吾代毛所知武磨代乃
岡之草根乎去來結手名とあるハ君ガヨハヒヲモ吾ヨ
ハヒヲモ兼ニシラウト云意なり母ハ物ニを兼ていふ
詞なり○一卷十三ノ數々毛見放武八万雄情無雲乃隱
障倍之也とあるハ數々デモ或ハ數々ナリトモと云意
なり心だらひなることをかかふべともせめて數々か
とともと云意なり○一卷十七ノ百磯城之天宮處見者
悲毛などかゝる處は用ひとる毛ハ皆歎息の辞にてサ

テモマアカナシイコトニテアル哉といふ意なり○二
卷十二ノ玉葛花耳聞而不成有者誰戀尔有目吾孤悲念
乎とあるハタガコヒナラモと訓て誰ガ戀ハ有むと云
意なりされバこの目ハ牟の通へる辞にて俗に誰ガ身
ノ上ノ戀デアラウといふよあされり
もくさく タントサク
二卷三十ノ水傳磯乃浦回乃石乍自木丘開道乎又將見
鴨とあるハ俗ハタントサクと云意なり
もころを ホウバイ
九卷三十ノ後有菟原壯士伊仰天叫於良妣踞地牙喫建
六丁

怒而如己ビラモコロラ男尔ニラマケテ負而者ハアラジト不有跡カキハキ懸佩之ノラチト小劔取佩トコ冬菽コ蒨都ツ
良尋ラミチ去礼ケレ婆云バとある母己モコロ呂ハコ如イダといふ意の古言
よて廿卷ニハ十見ゆ如己モコロラ男ハコ字意のごとし俗は傍輩
といふが如し

もだ ダマル ソノマハ

三卷ニ三十ニ黙然モダ居而リテ賢良サシラ為者ハ飲酒而サケニ醉泣モオキ為尔ニ尚不ナホ如シカ
來とあるハマツテマツテヲツテと云意あり十七ニ一ニ佐サ
家理等母之良受之安良婆母太毛安良牟已能夜萬夫吉
乎美勢追都母等奈とあるハイ咲イ夕ト云コトヲモ知ズニ
居ルナラマサテモ病躰ニアラズハ行テ見ヤウニト

思ウテ太息ヲツクコトモセズニソノマハマダマツテ居ル

ヨウニと云意ありマメメグララと云意あり

もどほりニメメグララと云意あり

十九ニ三十ニ大殿乃此母等保里能雪奈布美曾称云くと
あるハメグララといふことあり

もどほるマハル

古事記神武天皇御歌加牟加是能伊勢能宇美能意斐
志尔波比母登富呂布志多陀美能伊波比母登富理宇知
豆志夜麻牟集中行多毛登保留又榜多毛登保留など
往キある多ハ添タさる詞よてみれマハルといふことあり

もこな メツタムセウニ ムサト エシヤクモナウ

三卷^{二十}四^丁又^ニ如是^{カシ}故^{コト}尔^ニ不^ミ見^ジ跡^ト云^フ物^ヲ乎^サ樂^サ波^ノ之^ノ舊^ル都^ヲ乎^ヲ令^ミ見^セ

乍^ツ本^{モト}名^ナとあるハ本名^{モトナ}令^ミ見^セ乍^ツといふことよてメツタム

セウニ見^セテサ或^ハムサト見^セテサと云意なり四卷

三十^二狭^サ夜^ヨ中^ナ尔^ニ友^ト喚^{コト}千^チ鳥^{ドリ}物^キ念^ト跡^ト和^ワ備^ベ居^ル時^キ二^ニ鳴^キ乍^ツ本^{モト}名^ナ

とあるハ本名^{モトナ}鳴^キ乍^ツといふことよてエシヤクモナウ鳴

テサジユツナガラセルと云意あり

もなく仕合ヨウブナンデ

五卷^{三十}七^丁又^ニ靈^{タマ}尅^{キル}内^{ウチ}限^{カギ}者^ハ乎^ハ氣^ケ久^ク安^{ヤス}久^ク母^モ阿^ア良^ラ牟^ム遠^ト事^{コト}母^モ無^{ナク}

裳^モ無^{ナク}母^モ阿^ア良^ラ牟^ム遠^ト云^クとあるハ仕合ヨウ或^ハブナンデ
の謂^イなり

もの^{モノ}ヲ^ヲ観^ミモノ^ノヲ^ヲ三^ニ香^ニ一^ニ社^ニハ^ハ觀^ミ平^ニ下^ニ身^ニ脚^ニ

四卷^{十八}又^ニ吾^{アガ}以^モ在^{タル}三^ニ相^ニ二^ニ搓^ル流^ル絲^{イト}用^テ而^テ附^ケ手^テ益^{マシ}物^{モノ}今^{イマ}曾^ゾ悔^シ

寸^チとあるハ結^ビ着^ウモノヲ又^ハ結^ビ着^ウ物^{モノ}ヂヤニとい

ふ意なり五卷^{二十}又^ニ阿^ア摩^マ等^ト夫^ブ夜^ヤ等^ト利^リ尔^ニ母^モ賀^ガ母^モ夜^ヤ美^ミ夜^ヤ

古^コ摩^マ提^テ意^イ久^ク利^リ摩^マ遠^ト志^シ豆^ト等^ト比^ヒ可^カ弊^ヘ流^ル母^モ能^ノ十^ジ三^ハ又^ニ公^{キミ}奉^ム

而^テ越^チ得^チ之^シ牟^ム物^{モノ}古^コ事^シ記^キ履^レ中^チ天^{テン}皇^ス御^ミ歌^カ又^ニ多^タ遲^チ比^ヒ怒^ヌ迹^ニ泥^ニ牟^ム

登^ト斯^シ理^リ勢^セ婆^バ多^タ都^ツ基^キ母^モ暮^モ母^モ知^チ豆^ト許^コ麻^マ志^シ母^モ能^ノ泥^ニ牟^ム登^ト斯^シ理^リ

勢^セ婆^バ雄^ユ畧^{リョク}天^{テン}皇^ス御^ミ歌^カ又^ニ加^カ那^ナ須^ス伎^キ母^モ伊^イ本^ホ知^チ母^モ賀^ガ母^モ須^ス岐^キ波^ハ

奴流母能。これらの母能皆同ト。
 もはら スキト 子カラ
 十一 一四 丁 二 海底奥乎深目手生藻之最今社戀者為便無
 寸とある最ハ俗よスキトといふみあされり。又子カラ
 とみ譯すべし。古今集よ逢事のもをら絶ぬる時よこそ
 人の戀しき事も忘りけれとあるも同ト。
 もはむを 思ハウヨリハ
 三卷 一三 丁 二 驗無物乎不念者一坏乃濁酒乎可飲有良師
 とあるハセンノナイ物ヲ思ハウヨリハと云意あり。
 もらす 母モテツシヤル

十卷 四十 丁 二 足日本乃山之跡陰尔鳴鹿之聲聞為八方山
 田守酢兒とあるハ山田ヲ守ラツシヤル人と云意あり。
 ○や部
 やカ
 戀哉將渡今也咲良武などあるハコヒロワタラウカ今サ
 クラウカと云意なれば也ハ俗言よカと云よあされり。
 やさー ハヅカシ
 五卷 丁 二 多麻之未能許能可波加美尔伊返波阿礼騰吉
 美乎夜佐之美阿良波佐受阿利吉又 卅 世間乎守之等夜
 佐之等於母倍杼母飛立可祢都鳥尔之阿良祢婆などあ

るハ、ハツカシと云意なり。古今集も、何をして身のいと
づらよ老ぬらむ年の思もむ事もやさしきとあるも同
ト、竹取物語も、あまとの人れこゝろざしおろろならざ
しをむなくくるしてこそあれ、きのふけふみあど
此のよまをむことにつらむひととき、やさしといへを
云く、源氏物語真木柱も、今ハ志のいまめかしき人を
とてもてかゝづらむかともみよ人まろくてそひも
のし給もむも、人きゝやさしかるべし、契冲云、俗よこゝ
ろある人をやさしき人などいふを、はづらしき人とい
ふことなるを、何となくいひるるゝまゝに、風流なるこ

とを、をるもちやさしといふやうにのみ、おむひあへり。
やつよ、永代（永代）、多知婆奈能登乎能多知波奈夜都代尔母安
礼波和須礼自許乃多知婆奈乎とある、夜都代ハ、弥津代
よて、永代ニモと云意あり。
やと、イヘノ戸
四卷（五十一）、暮去者屋戸開設而吾將待夢尔相見二將來
云比登乎十二（八）、人見而事害目不為夢尔吾今夜將至
屋戸閑勿勤とあるハ、舎屋ノ戸よて、屋に闔戸を謂也、古
事記も、天照大御神見畏閑、天岩屋戸而刺許母理坐也と

あるも、石屋は闔戸なり。

やど イヘノメグラ テイゼン ヤシキ内 旅シユク イヘ井

十卷 九 梅花取持見者吾屋前之柳乃眉師所念可聞又

三十 吾屋戸尔鳴之鴈哭雲上尔今夜喧成國方可聞遊羣

又 四十 影草乃生有屋外之暮陰尔鳴蟋蟀者雖聞不足可

聞るとあるハ、屋戸と書る字の意よて、をべて舍屋ノメ

グラといふことなり。或ハテイゼン、ヤシキ内など、も

歌よよりて聞べし。○六卷 一 四十 久堅乃雨者零敷念子

之屋戸尔今夜者明而將去。八卷 四 五十 波太須珠寸尾花

逆葦黒木用造有室戸者迄萬代。戸字舊本又 丁 青丹吉

奈良乃山有黒木用造有室戸者雖居座不飽可聞十九

丁 青柳乃保都枝與治等理可豆良久波君之屋戸尔之

千年保久等曾などあるハ、即家居のことなり。○十八

丁 夜夫奈美能佐刀尔夜度可里波流佐米尔許母理都

追牟等伊母尔都宜都夜十五 丁 君之由久海邊乃夜杼

尔奇里多々婆安我多知奈氣久伊伎等之理麻勢などあ

るハ、旅などにありて、宿卧する屋を謂て、常ニ宿といふ

ニ直ニあされり。旅シユクと譯をべし。

やはを カウサンサセル

二卷 三十 千磐破人乎和為跡不奉仕國乎治跡云々と

あるハ朝敵ヲカウサンサセヨトテと云意なり廿卷五
丁二知波夜夫流神乎許等牟氣麻都呂倍奴比等乎母夜
波志とあるも降參サセと云意なり大殿祭祝詞言直
志和志古語云坐豆云倭姬命世記夜波志都米なる
ども見えたり

やまびこ コダマ

八卷四十山妣姑乃相響左右妻戀尔鹿鳴山邊尔獨耳
為十卷十八山彦乃答響万田霍公鳥都麻戀為良思左
夜中尔鳴などあるハコダマノヒバクマテといふこと
なり

やまのは 山ノハシ 山ノハナ 長春雨 水増去 柳木ナ
三卷一丁二所見見十方孰不戀有米山之末尔射狭夜歷
月乎外尔見而思香とあるハ山ノ端末ニなり或ハ土左
の方言よ山ノハナと云よ同ト四卷十二山羽六卷三
二山ノ葉又同卷七十一山葉十五十一山ノ
波など見えたりみな同ト

やまのま 山ノアハヒ

一卷十三青丹吉奈良能山乃山際伊隱万代云三卷
四十山際尔伊佐夜歷雲者云又山際從出雲兒等者
云又九山際往過奴礼婆云六卷十三象山際乃

云く。又四十三丁鹿脊山際尔云く。七卷九丁山際尔渡秋
 沙乃云く。又十丁山際尔霞立良武云く。八卷十四丁山際遠
 木末乃云く。十卷七丁山際尔鷺喧而云く。又八丁山際尔雪
 者零管云く。又山際之雪不消乎云く。又九丁山際最木末之
 云く。などある山際ハ山の間を云。或人これらの山際を
 ヤマノハと訓るをひが言なり。島際木際なども書り。際
 をマなることまぎれる。玉篇ハ際接也。壁會也。方也。合
 也とあり。これもマと訓べき據なるをや。
 やまかひ○やまのかひ山下山トノアハヒ
十卷九丁足日木之山間照櫻花是春雨尔散去鴨十七
十二

五丁夜麻可比尔佐家流佐久良乎多太比等米伎美尔弥
西底婆奈尔乎可於母波牟同卷十三丁山乃可比曾許登
母見延受乎登都日毛昨日毛今日毛由吉能布礼く婆な
どあるみち山ト山トノアハヒと云ことなり。
 やまもせに山一パイニ
 せ部は出。
 やまこちばか ヤブカウジ
四卷二十丁足引之山橘乃色丹出而語言繼而相事毛將
有廿卷二十五丁氣能己里能由伎尔安倍互流安之比奇之
夜麻多知婆奈乎都乃尔通弥許奈るとな不あり今俗小

ヤブカウジと呼也。

やまさび 山メキ

さ部さび條合考べし。

やろ イナス

四卷 丁二 打日指ウチヒサス宮ミヤ行ユク兒コ乎ヲ真マ悲カシ見ミ留トム者ハ苦ク聽シ去ヤル者ハ為ス便ベ無ナシとあるハイナスと云意なり。古今集陸奥歌もあふくまに霧立渡り明ぬとも君をばやらし待ハをべあしとあるも君をバイナスマイと云意なり。

ゆ部

ゆ エル

見由ミユハ三ハエエルル聞由キユハハキキココエエルルと俗ソコはハいいふふ亦オ同ト今イマの

ゆ

カラ

目

ヲ

ニ

見

ル

ハ

四

五卷 丁九 伊豆久由加 又 一丁 阿麻能見虚喻六卷 丁十一

真木立山湯 又 丁十二 左日鹿野由 十一 丁七 久時由 十四 丁三

丁二 伊豆由可母 十五 丁七 伊素未乃字良由 又 丁八 奈美能

字倍由見由 十六 丁三 中門由 十七 丁九 伊尔之弊由

十九 丁三 平城京師由 廿卷 五 丁二十 字倍之神代由 又 丁三

六之良比氣乃字倍由などあり此等の由ハ用理と云ふ

同意よりて常ヨカラといふも同ト久時由ハ久シイ時

カラと云意なるも餘ハ准べし 〇十八 丁六 許由奈伎和

多礼十四三十三。於保夫祢乎。倍由毛登毛由毛。可多米提之。許曾能左刀妣等。阿良波左米可毛。るどある由ハ。ヲと云意なり。許由ハ。此間ヲと云意。倍由毛登毛由毛ハ。舳ヲモ艦ヲモと云意なる。餘ハ准へて知べし。繼體天皇紀歌。歟都細能。娑婆庾那峨例俱屢とある。庾も同。此ハ古今集春下。清原深養父。歌の詞書。山川より花の流さけるを作るとある。山川より。山川ヲと云意なる。其用理と全同ト用様なり。○十四十四。目由可汝乎見牟とあるハ。目ニ汝ヲ見ヤウカと云意あり。此ハ四卷三十一。從蘆邊アシヘヨリミナクルシホ滿來塩乃云く。とあるも。蘆邊ニと云意。よて。今の

由ハ。この從と全同ト。ゆきこらは。行トバイテ。十九十四。韓國尔。由伎多良婆之氏。可敞里許牟。麻須良多家乎尔。美伎多氏麻都流とあるハ。行トバイテと云意あり。ゆきかへる。ナンベンモイタリキタリスル。六卷二十。往還常尔我見之。香椎瀆。從明日後尔波。見縁母奈思とあるハ。ナンベンモイタリキタリシテ常ニ見タ。と云意なり。十卷十一。春霞立春日野乎。往還吾者相見。弥年之黄土とあるハ。毎年春ニナツタナラナンベン

モイタリキタリシテアソバウと云意なり。

ゆきけ 雪ドケ

三卷^三八^丁二、雪消^{雪消}為^為山道^{山道}尚^尚矣^矣名積^{名積}叙^叙吾來^{吾來}並^並二^二とあるハ、
雪ドケスルといふなり。雪のふらむとする氣色を雪氣
といへること古^古なふし。

ゆくさくさ イキシナキシナ イキシダキシダ

三卷^三二^丁二、白管^{白管}乃^乃真野^{真野}之^之榛原^{榛原}往^往左來^{左來}左^左君社^{君社}見^見良米^{良米}真野^{真野}
之^之榛原^{榛原}とある左^左ハ古言^{古言}ニ時^時といふことを之^之太^太とも左^左
太^太とも云るをその之^之太^太も左^左太^太も縮^縮れむとも左^左とあ
れり。肥前風土記歌^{肥前風土記歌}ニ為^為祢^祢互^互牟^牟志^志太^太夜^夜率^率祢^祢てむ集中^{集中}十

一^一三^三十^十二、此^此左^左太^太過^過而^而十^十四^四ニ^ニ十^十二、阿^阿抱^抱思^思太^太毛^毛安^安波^波乃^乃敝^敝
思^思太^太毛^毛廿^廿卷^卷六^六丁^丁二、和^和須^須例^例母^母之^之太^太波^波あど猶^猶多^多あり。これ
を今^今も土左^{土左}國^國の方言^{方言}ニ行^行シダ來^來シダなどいふも古言^{古言}
の遺^遺れるなり。京師^{京師}あよりよてハ行^行シナ來^來シナといへ

ゆくく ダクく ドキく ワナく

二卷^二十^十八^八二、丹^丹生^生乃^乃河^河瀨^瀨者^者不^不渡^渡而^而由^由久^久遊^遊久^久登^登戀^戀痛^痛吾^吾弟^弟
乞^乞通^通來^來祢^祢とあるハ、ダクく或^或ハドキくト動^動悸^悸して戀^戀る
謂^謂なるべし。大^大船^船乃^乃由^由久^久羅^羅くくといふも、物^物の動^動搖^搖兒^兒
をいふ古言^{古言}よて、同^同トことふきこゆ。又^又ハワナくとも譯

をべし。古言より傳へたるものなり。如是許將戀物其跡知者其夜者由多尔有益物乎とあるハソノアフタ夜ハユルク宿テハナシラスベキモノデアツタニと云意なり。

ゆさけき タブツク

三卷二十廬原乃清見之崎乃三穗乃浦乃寛見乍物念毛奈信廿卷二十海原乃由多氣伎見都安之我知流奈尔波尔等之波倍奴倍久於毛保由などあるハタブク上浪ノタブツイテ面白イ風景ヲ見ナガラと云意なり。

海の廣く寛ユカふるを云ハ非ズ浪の由多ユタくと動揺サワを云るなり。寛と書ルハ借字のみなり。

ゆふさらず バンク

三卷三十今日可聞明日香河乃夕不離川津鳴瀬之清有良武七卷三十三空往月讀壯夕不去目庭雖見因縁毛無十卷四十暮不離蝦鳴成云くなどあるハバンクと云意なり。每朝を朝不去と云と全同例なり。

ゆめ ダイジニセヨ ヨウマモレ カナラズ

在許須勿由米散許須勿由米紐解勿由米汝心由米などいふ由米ハ勤よといふことにて俗ハダイジニセヨ或

ハヨウマモレといふ意なり。今世も由米ユメ云々の
こと有アル勿ナなどやりよいふもダイジニセヨダイジニセ
ヨ。決シテ云々ノ事アルナと云意なり或ハカナラズカ
ナラズと聞て宜ヨシき所もあり。

ゆ、いき オソレオホイ 慮外ガマシイ

二、卷三十一 二、挂文カケマクモ忌之伎イミマクモ鴨言久母カモイマクモ綾尔畏伎アヤニカシヨキ云々、三、卷十五

七、言卷毛イハマシモ齊忌志伎イサシシキ可物カモノ云々などあるハ、オソレオホ

イ、或ハ慮外ガマシイと云意なり、恐れ多くて忌憚イマハ一
き謂イハよいへるなり。六、卷十九 二、言卷毛湯イハマシモ湯ユ敷有跡シカラムト又ト三

六、繫卷裳湯カケマクモ石恐シカレコシ十五、湯種ユクチ蔣忌ヤシキ伎美尔キミニ故非和コヒワ

多流香母タルカモなどあるも同トト、ろむえなり。四、卷十七 二、

獨宿而絶西紐ヒトリチテタニシヒモ緒忌見跡ユシミト世武セム為便ベシラ不知チニシ哭耳ナクミ之曾泣ソツナクとあ

るハイマシカラウトテと云意なり、九、て紐ハ、マカあ

ひあれる妻メならでハ、結ホコビひ着キしむべきものならぬを、離

れ居て妻メがあらぬ故ユ、綻ホコビし紐ヒモを、他人タニなどト着キしめむ

ハ、忌憚イミハカラし思ふ謂イハなり。十、卷五十四 二、言出而コトニデテ云者イハバ忌深イミシ朝アサ

貌乃穂庭開不出ガホノホニハサキデヌ戀為鴨コヒモルカモとあるも同ト、十二、朝去而アサクニテ

暮者ユフバ來座君キマシ故尔コトニ忌イミ久毛クモ吾者アハ歎鶴鴨ナゲキツルカモとあるハ、イマカ

シウ、或ハキラハシウと云意なり。十七、許登尔伊コトニイ

泥底伊波婆由遊思美云々古事記雄略天皇大御歌由
由斯伎加母加志波良衰登賣などあるも忌くく嫌ハ
くくて憚らるゝ方なり。

ゆらく グワラツク

廿卷五十二始春乃波都祢乃家布能多麻婆波伎手尔等
流可良尔由良久多麻能乎とあるハ玉の聲の鏘くと鳴
響を由良久と云るよて俗よグワラツクといふが如
し玉之緒と結めとるハ其緒の鏘くと鏘くと云よの
詞つゞきに聞ゆれども緒の鳴と云べくもあらざれ
む緒よ貫とる玉の鏘鳴よと云意を語路よ引れて由良

久玉之緒とハよまれとるなり鏘鳴くハ手玉の聲なり
と云説ハあらず玉帚の玉なり又由良久を命を延る
こと、意得來れるハ命のことを靈之緒といへること
のあるによりて推度よ志の思へるよてさらよ云小も
足ぬことなり。

ゆらに○ゆらよ

グワラツク

ガラク

十卷卅二足玉母手珠毛由良尔織旗乎公之御衣尔縫將
堪可聞十三ハ海部處女等手尔卷流玉毛湯良羅尔云
云とある湯良羅ハ由良と云るよ同ト此ハ貫とる玉の
觸合てグワラツクと鳴聲を云ことなり古事記ハ伊邪那

岐命云く其御頸珠之玉緒母く由良尔取由良迦志而云
云まご奴那登母く由良尔とあるを日本紀又瓊響瑤く
此云奴儼等母く由羅尔と見えまご手玉瑤瓊織経之少
女是誰之子耶ともありて瑤くも玲瓏も玉聲と字書よ
見えたり職員令集解ふ饒速日命降自天時天神授瑞寶
十種息津鏡一部津鏡一八握劍一玉生玉一足玉一死反玉
一道反玉一蛇比礼一蜂比礼一品之物比礼一教導若
痛所者合茲十寶一二三四五六七八九十云而布瑠部由
良く止布瑠部如此為者死人返生矣とあるも多くあ
る玉よつきて瑤くと振へと詔へるなり十三丁小鈴

文由良尔とあるも鈴音のガラクと響をいへり古事記
袁祁天皇大御歌又奴豆由良久母夜とあるも同言を活
用して詔へるあり上に出せる由良久多麻能乎も同ト
遊仙窟又鏝くをユラメイテと訓る此字も瑤くと同ト
さて集中なるハ母由良尔とある母ハみか語辞なるを
古事記と日本紀なるとの一の母ハ真よて真瑤くあり
ゆりノチ
八卷二十下吾妹兒之家乃垣内乃佐由理花由利登云者
不許云二似とあるハノチニアハイウトイヒタレバと云
意なり十一丁路邊草深百合之後云妹命我知とある

吾戀目アレコヒメヤモ八方とあるハ、人妻ナルモノヲ、或ハ人妻ヲヤニ
 と云意なり。この用様オホフ子きハめて多ク○十三十、大舟能
オモヒクニルキニエニ思憑君故尔、盡心者、惜雲梨とあるハ、君なるハ故オホフ子と云
 意の用ひ様よて、君ニヨツテと云シラハ、如ク、十六十四、真
 珠者、緒絶為尔、伎登聞之故尔、其緒復貫吾玉尔、將為とあ
 るハ、聞タニヨツテと云ハ、如ク、日本紀雄略天皇卷、歌ハ、
 耶麼能謎能、古思麼古喻衛尔、比登涅羅賦、宇麻能耶都礙
 播、鳴思替矩謀那斯とあるハ、コシマ兒ニヨツテと云ハ
 如ク、これらハ皆今世キミも常云如き故、よの意なり。古語
 云、ろハ、多クを君故尔、妹故尔キミニエニイモニエニと云ハ、君ナルモノヲ

或ハ君ヂヤニ、妹ヂヤニと云意、よ用ひて、尋常の如くい
 へることハ、いと少けきと、とえてなきよハ、あらず。

○よ部

よ 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

と云意なり。此用ハ許多なり。此ハ三井能上從鳴渡遊久
 るといふ從^{ヨリ}全同ト。○五卷^{十九}久須利波牟用波云
 云。十四^{十一}。与曾尔見之欲波云くふとあるハ。藥ヲ飲
 ニマサツテ。外テ見タニマサツテと云意なり。和礼欲利
 母貧人乃父母波飢寒良牟などある欲利^{ヨリ}全同ト。
 よくクハシウ子ンゴロトクトトツクリ
 一^{十六}卷^丁。淑人良跡吉見而好常言師芳野吉見与良人
 四來^三とあるハ。ムカシアツタ淑人ノ美地チヤトテ。ク
 ハシウ見テナルホド勝地チヤトイウタ。芳野ハコ、ゾ
 トツクリト見ヤレ。大カタニ見スグスナカヘスバモ

子ンゴロニ見ヤレ。今ノ良人ヨとなり。六卷^{二十}。難波^{ナニハ}
 方^ガ潮干乃奈凝委曲見名在家妹之待將問多米十卷^{十七}
 二。朝戸出之君之儀乎曲不見而長春日乎戀八九良三
 どある曲もトクト。或ハトツクリと譯すべし。ふ多し
 みふ此よ准べし。
 よぐとちヨナカスギ
 十九^十。夜具多知尔寢覺而居者河瀬尋情毛之奴尔鳴
 知等理賀毛又^同夜降而鳴河波知登里宇倍之許曾昔人
 母之奴比來尔家礼などある夜具多知尔ハ夜半スギニ
 といふ意あり。夜降而ハ夜半スギテといふ意あり。夜半

を絶頂と立て、それと至るを、のぶるといふ意にて、それ
過るを降つとていふあり。

よこす ワルクチイフ

十二^四人言之^{ヒトコトノ}、護乎^{ヨクサヲキ、}聞而^テ玉梓^{タマホコノ}之道^ノ毛^ミ不相^{アハズ}常^{タエニシ}云^{ワギモ}吾妹^モと

あるを、惡口^{ワレクチ}イフヲキイテ、と云意あり。

よごもり ヨゴミ ヨゴメ

十九^{十五}許能^{コノ}久礼^{クレ}罷^ノ四月^{ウツキ}之^ノ立者^{タテバ}、欲^{ヨゴ}其母^{モリ}理^リ尔^ニ、鳴^{ナク}霍^{ホト}公^ト

鳥^{ギス}云くとあるハ、夜^ヨゴメにて、曉^{トキ}方^ノのまご明^{アカ}やらぬをど

をいへり、四^{四十}卷^ニ戀^{コイ}く而^テ相^{アヒ}有^{アル}物^{モノ}乎^カ、月^{ツキ}四^シ有^{アレ}者^バ、夜^ヨ波^ハ隱^{コモル}

良^ラ武^ム須^シ史^シ羽^ハ蟻^{アリ}待^{マテ}とあるも、夜^ヨの末^ノの残^ノれるを云て同^ト

三^{二十}卷^ニ、掠^{クラ}橋^{ハシ}乃^ノ山^{ヤマ}乎^カ高^{タカ}可^カ、夜^ヨ隱^{コモリ}尔^ニ、出^{イデ}來^{クル}月^{ツキ}乃^ノ光^{ヒカリ}乏^{トモシ}寸^キと

ある夜^ヨ隱^{コモリ}も、同意^トにて、夜^ヨ深^{コソ}て出^{イデ}る月^{ツキ}をいへるあり。

よー シカタ

四^{五十}卷^ニ、早^{ハヤ}河^{カハ}之^ノ湍^セ尔^ニ居^{イル}鳥^{トリ}之^ノ縁^{ヨシ}乎^カ、奈^ナ弥^ミ念^ネ而^テ有^{アリ}師^シ、吾^ワ兒^コ

羽^ハ裳^モ何^{ナニ}怜^レとあるハ、為^シ方^{カタ}が無^{ナシ}サニと云意あり、八^{五十}卷^ニ

、松^{マツ}影^{カゲ}乃^ノ浅^{アサ}茅^チ之^ノ上^{ウヘ}乃^ノ白^{シラ}雪^{ユキ}乎^カ、不^ズ令^ズ消^{オクム}、將^{オカム}置^{ヨシ}吉^{ハカ}者^モ可^カ聞^ク、奈^ナ吉^キ

吉^キ者^ノの吉^キ、字^ジ、舊^コ本^{ホン}言^{ハシ}は誤^アれり、とあるハ、イツマテモ消^{オクム}サズニ置^{ヨシ}ベキ為^シ

方^{カタ}ハアルマイカ、と云意あり、伊^イ勢^セ物^{モノ}語^ゴ、あゝねどもい

えよぞかふる色^{イロ}見^ミえぬ、心^{ココロ}を見^ミせむよーのな^ナけま^マと

あるも、心^{ココロ}ノウチヲゴランニ入^イベキシカタガナケレバ、

と云意あり。

よゝゑやーヨシヤ エイハ

二卷十八。石見乃海。角乃浦。田乎。浦無等。人社見良目。酒無等。人社見良目。能咲八師。浦者無友。縱畫屋師。酒者無鞞。云々。とある。能咲八ハ。假ニ縱ス。辞ニテ。十分ナコトハナケレドモヨシヤ。或ハエイハと云意あり。下の師ハ助辞あり。

よまの 心ノヨセドコロ タヨリドコロ

三卷九丁。白細之云々。吾妹子之入尔之山乎。因鹿跡叙念。その反歌。打背見乃。世之事尔在者。外尔見之山矣。耶

今者。因香跡。思波牟。あどあるハ。心ノヨセドコロと云義なり。又タヨリドコロとも聞べし。抑余須可ハ。所縁波可トなるべし。波可トハ。何處を波可ト。あど云波可ニテ。慥ニ其處を指ていふ言あり。さてヨセハカを約れば。切セヨサカトなるを。サをスニ轉して。ヨスカトハ。いふならむ。故慥ニ其處を所縁と心をよせ定むる意なり。十六丁。志賀乃山。痛勿伐。荒雄良我。余須可乃山跡。見管將。偲とあるも同ト。常ニ与須我ト濁るハ誤なり。可ハ清音なり。よそへ。ワケガアル

八卷五丁。沫雪尔。所落。開有梅花。君之許。遣者。與曾倍。互

牟可聞とあるハ、君ガトコロヘヤツテ見セタウハアレ
ドモ、君ガトコロヘヤツタラ、人ガ見テ、君トコチトニワ
ケガアルヤウニ、イヒナサウモシレヌ、との謂なり。十卷
六十^二、梅花先開枝手折而者、褱常名付而與副手六香聞
十一^二、争者神毛惡為、縱咲八師、世副流君之、惡有莫
君尔、古今集俳諧題詞、從弟るりける男、ふよそへて、人
のいひけき、ばるどあるも同じ。

よそりへツキソヒ
四卷^{十八}、春日野之山邊道乎、與曾理無通之君、我不所
見許呂香裳とあるハ、俗云、中間若黨ナドノツキソヒ

隨フ者ナウテ、一人通フタと云なるべし。十四^{二十}、比
登祢呂尔、伊波流毛能可良安乎、祢呂尔、伊佐欲布久母能、
余曾里都麻波母とある余曾里も同言よて、ツキソウタ
ツマと云なるべし。

よなきかへらふ ナンベンモく夜鳴ヲスル
二卷^九、朝日照佐太乃岡邊尔、鳴鳥之夜鳴變布、此年
己呂乎とあるハ、ナンベンモく夜鳴ヲスルと云意な
る。

よのほと シヤウガイ
十二^九、世間尔、戀將繁跡、不念者、君之手本乎、不枕夜毛

有^{アリ}寸^チとあるハ、ワシガ生涯ノ間ニ、コレホドマデ戀シウ
思ハフトハオモハザツタレバ、と云意なり。

よのかぎり シヤウガイ

廿卷^{四十四}多^タ知^チ之^シ奈^ナ布^フ伎^キ美^ミ我^ガ須^ス我^ガ多^タ乎^ハ和^ワ須^ス礼^レ受^ズ波^ハ與^ヨ
能^ノ可^カ藝^ギ里^リ尔^ニ夜^ヤ故^コ非^ヒ和^ワ多^タ里^リ奈^ナ無^ムとあるハ生涯ニと云意
あり。

よのあひだ 生涯

十七^{三十一}之^シ良^ラ奈^ナ美^ミ能^ノ與^ヨ世^セ久^ク流^ル多^タ麻^マ毛^モ余^ヨ能^ノ安^ア比^ヒ太^タ母^モ
都^ツ藝^ギ底^ヂ民^{ミン}仁^ニ許^コ武^ム吉^キ欲^ヨ伎^キ波^ハ麻^マ備^ビ乎^ハとあるハ生涯ニモと
云意なり。

よのほどろ 夜ノヒキアケ

四卷^{五十一}夜^ヨ之^ノ穗^ホ杼^ド吕^ロ吾^ワ出^デ而^{シテ}來^キ者^バ吾^ワ妹^モ子^コ之^ガ念^{オモ}有^{ヘリ}四^シ九^ク
四^シ面^{オモ}影^{カゲ}二^ニ三^ニ湯^ユとあるハ夜ノ分離^{ハナレ}よて俗^ハニ夜ノヒキア
ケノ頃^トと云意なり。穗^ホ杼^ド吕^ロと波^ハ那^ナ礼^レと音通^ヒひて同言^ナ
ル。集中^ニ雪^{ユキ}歌^カニ穗^ホ杼^ド吕^ロとも波^ハ太^タ礼^レとも通^ヒよめる。太^タ
那^ナと又^マ殊^トニ親^{オカ}通^トへバ穗^ホ杼^ド吕^ロ波^ハ太^タ礼^レ波^ハ奈^ナ礼^レハ皆^ハ全^ク同言^ナ
なり。さて夜ノ分離^{ハナレ}とも夜ノ明^{アカ}まむと臨^スる極^キを云^フ其^ハ
夜^ノ最^カ極^キの^カあ^リな^キま^バか^クい^へり。雪^{ユキ}ニ云^フるも分離^{ハナレ}
分^ハ離^レニ零^ツるを云^フなり。此^レ言^フ古^ク來^キ説^ク多^クあ^れども解^キ得^ズ
る人^ハ一人^ニもあ^らず。八^{ハチ}卷^{三十一}秋^{アキ}田^タ乃^ハ穗^ホ田^タ乎^カ鴈^ガ之^ノ鳴^ナ聞^ク尔^ニ

夜之穂杼ヨノホド呂尔毛ロニモ鳴渡可聞ナキワタルカモとあるも同一。

よばひ 夫婦ノヤクソク

九卷三十一。智奴壯士チヌヲトコ宇奈比壯士ウナヒヲトコ乃ノ廬八燎イハヤス須酒師スシ競相キョウシ結婚ヨバヒ為家類シケル時者トキニ云ク。十二ハ。他國ヒトクニ尔ニ結婚ヨバヒ尔行ニキテ而タチ太刀タチ之緒毛ガオモ未解者イダナキバ左夜曾サヨソ明家流アケケルなどあるハ夫婦ノ約束スルと云ことあり。伊勢物語イセノモノト。昔男ありけり。女の得りまじかりけるを年を経てよむひりりけるを。からういて盗み出ていと暮まにきにけり。云く。昔男大和オホノある女を見てよむひてあひけり。云くなど見えたり。言意ハ本居氏呼ヨコより出イたるならむ。今世の語イマノヨ。婦をよぶと云

も此なり。竹取物語タケノト。闇の夜もこゝかこより垣間カイマ見まどひあへり。さる時よりむよむひとと云ける。と云るハ故コト興キョウ小作りて云るなり。十三ニ。夜延ヨバヒ為タスと書るも。正字マサナリハあらびと云り。源氏物語ゲンジノモノト玉葛タマカ。けさう人ハ夜ヨかくれカるをこそよむひとハひひけきとあるハかの竹取物語を思ひて。滑稽タガフシに。まさとをのしく書る。又をそのちと。夜延ヨバヒの意と心得ココロたるもあらむ。いづれ本義マシよも非ヒるなり。高尚コウカウの伊勢物語イセノモノト新釋シンシヤク。夜にかくきてをひりりたるをいふが本なり。と解トクなせるも。末小つきて本をりりたるなり。

よひく マイバンク

十卷 六十丁 吾屋戸尔開有梅乎月夜好美夕々令見君乎
社待也とあるハ、マイバンクといふことあり。

よむ カズヘル

四卷 十六丁 白妙乃袖解更而還來武月日乎數而往而來
猿尾とあるハ、月日ヲイツクト數計テといふことなり。
十七 三十丁 月日餘美都追とあるも同じ。抑餘牟とハ、も
と呼と同言よて、幾箇くくと呼て算計るなり。七卷 九十丁
浪不數為而十一 二十丁 時守之打鳴鼓數見者十三 五十丁
吾睡夜等呼讀文將取鴨古事記上卷。皆列伏度尔

吾踏其上走乍讀度など見ゆみな同ト、同書 山田

よむ ドモル

四卷 五十丁 百年尔老舌出而與余牟友吾者不厭戀者益
友とあるハ、年ヨリ齒ヌケ舌ガ出テ、詞ハドモルトモと
云意なり。

より カラ ヲ ニ ヘ ニ テ ニ マ サ ツ テ

二卷 十九丁 石見乃也高角山之木際從我振袖乎妹見都
良武香とあるハ、木際カラ妹が見ツラウカと云意なり。
こと尋常の用様よて、ととへむ古より今今より後、彼
より此此より彼などやうよ云ること許多なり。具く論

ふ及マデもる一○二卷十四。古イシルニ戀コ流ル鳥トリ鴨カモ弓ユ絃ヅル葉ハ乃ノ三井三井
能ノ上ウヘ從ヨリ鳴ナキ渡ワタリ遊ユク久ク又又自サ雲クモ間マ渡ワタリ相ア月ツキ乃ノ云ク十一二十。二十。
從ケ折ヨリ將ユカ去ム又又九三十。山ヤマ從ヨリ來キ世セ波ハ十六十七。二十。櫛イ津ツ乃ノ檜ヒ橋ハシ從ヨ
來リ許コ武ム云クなどある。これらハ三井ノ上ヲ鳴渡リ行又
雲間ヲ渡ル月ノと云意マて。其餘ハ准へて知べし。古事
記ニ降ル出ス雲國之肥川上。在鳥髮地。此時箸從其河流下。又
倭建命御詞ニ吾心恒念自虛翔行。然今吾足不得歩云々。
姓氏錄佐伯直條ニ于時青菜葉自岡邊川流下。天皇詔應
川上有人也云々。日本紀神武天皇卷ニ遡流而上。仁德天
皇卷ニ沂江ガホリ古今集春下。清原深養父歌の詞書ニ山川よ

り花の流れけるを作る。源氏物語須磨ニたきより船等
のうとひのとあまてこぎゆく。庭槐抄ニ近衛司等或自
水渡或過橋などあるみか同ト○四卷三十。八十。從ア蘆邊ヘ滿ミチ
來ク塩乃云々とある從ヨリハ二も一へも通キゆるなり。此ヨリ從
許コ多クあり○十一十七。山ヤマ科シ強コ田タ山ヤマ馬ウマ雖レ在ト歩カキ吾ウ來キ汝ナ念オモ不
得チ十三二十。五十。人ヒト都ツ末マ乃ノ馬ウマ從ヨリ行ユク尔ニ已オノ夫ツマ之ノ步カチ從ヨリ行ユク者バ云ク
などあるハ馬ニテ行歩ニテ行或ハ馬テイクク歩テイク
と云意マ通キゆるなり。古事記中卷垂仁天皇條ニ光海原
自船追來下卷安康天皇條ニ倏忽之間自馬往雙日本紀
應神天皇卷ニ浮船仁德天皇卷ニ浮江幸山背庭槐抄ニ

此所自舟參着云く。推古天皇紀よ、泛船これらみれ同ト
ことかり。○五卷九ニ又風雜云く。和礼欲利母貧人乃父
母波飢寒良牟云く。とあるハ。吾ニモマサツテ貧イ人ノ
云く。と云意あり。八卷六三又牽牛之念座良武從情見吾
辛苦夜之更降去者とあるハ。牽牛ニマサツテ云く。とい
ふ意なり。十五三ニ又比等余里波伊毛曾母安之伎故非
毛奈久安良末思毛能乎於毛波之米都追とあるハ。他ニ
ハマサツテ云くと云意なり。古今集よ。色よりも香こそ
あそれと思ふゆれ。誰が袖ふれし宿の梅をもとあるも。
色ニモマサツテ云く。といふ意なり。拾遺集よ。古ものな

アヤ志けむ吉野山山より高きよそひなる人とあるも。
山ニマサツテ云く。といふ意あり。又思ふより云ハたろ
うよ成ぬれば。ととへて云む言の葉をなきとあるも。思
フニマサツテ云く。といふ意よて同ト。○古今集よ。枕よ
り又知人もなき戀を涙せきあへずもらしつる哉とあ
るハ。枕ヨリホカニ云く。といふ意なり。又思ふよりい
よせよとの秋風ふ靡く浅茅の色ことになる。とあるも。
思フヨリホカニ云く。といふ意なり。万葉よハ見えねど。
古よりがやうよも用へるなるべし。此從も多し。
よるはすがらヨドホシ

十三十四 丁十四 赤根刺畫者終尔野于玉之夜者須柄尔又十二
一丁 赤根刺日者之弥良尔烏玉之夜者酢辛二丁 夜
ドホシといふことなり。

よろふ ソナハル

一卷丁 取与呂布天乃香具山云とあるハ香具山の
形の具足りとるを称賜へるものよて峯谷よりたどめ
て石木と至るまでかに一あおぬところなくとらひて
よくそろひとる謂よてソナハルといふことなり。
よろトあべツリ合ヨウ
一卷三丁 耳無之青菅山者背友乃大御門尔宜名倍神

佐備立有云とある名倍ハ並の謂よて打あひ宜しく
満足ひとるより言起りて俗よツリ合ヨウといふこと
なり。この言三卷六卷十八卷などよも見えたり。

○ら部

らく ルコトガ ルコトハ ルコトヲ ルコトヨ

二卷八丁 二丁 齒刺日者雖照有烏玉之夜渡月之隱良久惜
毛とあるハカクレルコトガと云意なり。七卷三丁 塩
滿者入流磯之草有哉見良久少戀良久乃太寸とあるハ
ミルコトガと云意なり。八卷四丁 宇陀乃野之秋芽子
師弩藝鳴鹿毛妻尔戀樂苦我者不益とあるハコフルコ

トガといふ意なり。十三ハ。天有哉。日月如吾思。有公之
日異。老落惜毛とあるハ。年ヨルコトガと云意なり。十卷
六十。一。眼見之。人尔戀良久。天霧之。零來雪之。可消所念。
二十。一。大海二。立良武浪間將有公。二戀等九。止時毛
十一三。一。梨などあるハ。コフルコトハ。或ハコフルヤウハと云意
あり。二卷四。一。白妙之。衣塗漬而。立留吾尔語久。何鴨本
名言云く。九卷十。一。世間之。愚人之。吾妹兒尔。告而語久。
須臾者。家歸而云く。妹之答久。常世邊尔。復變來而云く。か
とあるハ。カタルヤウハ。イヘルヤウハと云意。よきこえ
さり。十卷十。一。如是有者。何如殖兼山振乃。止時喪哭戀

良苦念者。六卷卅。一。御民吾生有驗。在天地之。榮時尔。相樂
念者。ちどあるハ。コフルコトヲ。アヘルコトヲと云意。あ
り。十卷一。一。春霞多奈引田。居尔廬付而。秋田蒨左右令
思良久とあるハ。シタハシメルコトヨと云意あり。十一
二十。一。足日本之。山田守翁置蚊火之下。粉枯耳。余戀居久
とあるハ。コヒラルコトヨと云意なり。十二二。一。石走
垂水之。水能早敷。八師君尔戀良久。吾情柄とあるハ。同ト
らくのルコトガ
七卷三。一。塩満者。入流磯之。草有哉。見良久。少戀良久。乃
太寸とあるハ。コフルコトガと云意あり。因ハ云む。古今

集、櫻花ちりかひくもれ老らくの來むといふなる道
まがふがふ。又老らくの來むと志りせば門さしてあ
ところへてあはざらまゝをるど見えたる。らくのと云
るハ、同ト語路なら。この古今なるハ、とい老といふこ
とを、老らくといへりときこそとり、かくて後くハ、又
此、古今集なるに本づきて、老らくと云ること多し。さて
万葉なる老良久ハ、見良久ミシラク、隱良久カクラクなどの良久ラクは同トく、
留ルの伸ママとる詞ママで、オユルコトガと云意なること、あ
らむるを、やかくてその詞ハ、かの老良久オユラク惜毛ウシモの老良オユラ
久クより、轉クひとるものなれば、オユラクとこそいふべき

雅言サマの定格サマなるを、わいらくとトもいへるハ、後ト唱を
さへ誤りとるものあり。
らくはルコトハ
十卷十丁丁ハ、吾ワガ瀬セ子コ尔ニ、吾ワガ戀コイ良ラ久ク者ハ、奥オク山ヤマ之ノ馬ウマ醉シビ花ハナ之ノ今イマ盛サカ
有ナリ十一十丁丁ハ、吾ワガ背セ子コ尔ニ、吾ワガ戀コイ良ラ久ク者ハ、夏ナツ草クサ之ノ荊カキ除ハラ十ト方モ生オヒ
布シラ知トシるどあるハ、コフルコトハと云意あり。
らくをルコトヲ
四卷四九九丁丁ハ、村ムラ肝キモ之ノ情ココロ摧クサ而テ如カク此ハ許ハカリ余アガ戀コイ良ラ苦ク乎ヲ、不シラ知バ香カ安ア
類ル良ラ武ム六卷六二十二十丁丁ハ、如カク是シ為ツ管ツ在アラ久ク乎ヲ、好ヨミ叙ゲ靈タマ剋キル短ミジカ命イチ乎ヲ、長ナガ
欲ホリ為スル流ルるどあるハ、コフルコトヲ、アルコトヲと云意あり

らくもルコトモ

七卷四十丁は、薦枕相卷之兒毛在者社夜乃深良久毛吾惜責とあるハ、フケルコトモと云意なり十二丁は、夕去者於君將相跡念許増日之晚毛悞有家礼とあるハ、クレル

コトモと云意あり。

らくにルコトチヤニ

八卷四十丁は、希將見人尔令見跡黄葉乎手折曾我來師雨零久仁十卷四十丁は、秋山乎謹人懸勿忘西其黄葉乃所思君君るどあるハ、フルコトチヤニ、オモハレルコトチヤニ

と云意あり、をべて、かく、けく、さく、なく、はく、まく、らく、さ

どの類みな同格ハタラは用く辞マテ譯言も大のと同トさま

かり、なを各、其條クまいへるを照考べし。

らソウナテアツタ

一卷四十丁は、朝獵尔今立須良思暮獵尔今他田渚良之云く、

とある良之ハ、さざりニ志ありとハ知れねど、十ハ七ハ八

を、それららむとハおちゆるをいふ詞マテ俗ハソウナと

いふハあされり、有ハ之成ハ之など云ハ、有良之成良之と云

又同トく、アルソウナナルソウナと云ハあされり○二、

卷二十丁は、暮去者召賜良之明來者問賜良志とあるハ、召

古言譯通冬

セラレテアツタ。問セラレテアツタと云意なり。この良
志ハ常云とハ異テ。過去一方のことをいふ一の格ハ
詞なり。十八ニ。美與之奴能許乃於保美夜尔安里我
欲比賣之多麻布良之毛能乃敷能云。廿卷ニ。於保
吉美乃都藝豆賣須良之多加麻刀能努故美流其等尔祢
能未之奈加由これらみお同ト。

らむ○らめ ラウ アラウ ヤラ シラヌ

將取と云ハトラウ。將渡と云ハワタラウ。と俗ニ云小同
ト。一卷ニ。嗚呼兒乃浦尔船乘為良武憾孀等之珠裳乃
須十二四寶三都良武香とあるハ。出帆シテイクラウ。女

房ノ裳裾ニ潮ガミチルラウカと云意あり。○三卷 三十
二。大汝少彦名乃將座志都乃石室者。幾代將經とあるハ。
幾代ヲ經タコトヤラ。或ハ幾代ヲ經タデアラウと云意
あり。○四卷 二十。山菅乃實不成事乎吾尔所依言礼師
君者與孰可宿良牟とあるハ。誰ト共ニ宿ルヅシラヌと
いふ意あり。ゾハ可ニあとり。シラヌハ良牟まあされり。
良米も許曾のかゝりの結びの異なるのみよて。譯言ハ
同ト。

○り部

り
サニ

行卷乎保利と云ハ、行ウコトガホシイサニと云意あり。
戀為便無利と云ハ、戀シウ思フケレド、シカタガナイサ
ニと云意なり。

り○れ

浦隱乎利など云ハ、ウラカクレテアルと云意なり。乎利
等母と云ハ、アルトモと云意なり。妹尔不相安利など云
ハ、妹ニアハズニアルと云意なり。安利等母と云ハ、アル
トモと云意あり。礼といふも、許曾のか、其の結の異な
るのみよて、譯言ハ同ト。

○る部

る

待留と云ハ、マタレル。流留と云ハ、ナガレルと俗よ云よ
同ト。

る○るれ

待留くと云ハ、マタレル。流留くと云ハ、ナガレルと俗よ
いふよ同ト。留礼といふも、許曾のか、其の結びの異な
るのみよて、譯言ハ同ト。

○れ部

れら○れらも
有礼可と云ハ、アレバニヤ。或ハアレバカシテと云意あり。

已戀礼可コラレカと云ハコフレバニヤ或ハコフレバカシテと云意なり十三九念戸鴨胃不安戀列鴨心痛カモコロイタキとあるハコフレバニヤ或ハコフレバカシテ心カ痛イデアラウサテモマアと歎息ナゲキとるあり可母カモの母ハ歎息辞モよてマアと云意なりされバ可母カモと云ハ歎息ナゲキの意あるときにいふ詞よて可カとのみ云よりハ委カき方あり心をつけて味べし

れむレヨウ
將馴ナレムと云ハナレヨウ將隱カクレムと云ハカクレヨウと俗ソコよ云イハふ同ト

れやレバニヤレバニヤレバカシテレバカシテ
一卷十五打麻乎麻績ウツソラマシ王白水郎オホキミマナシロウ有哉射等アリヤイラガ籠荷カゴ四間シマ乃ノ
珠藻タマモ拘麻須カウマスとあるハ白水郎オホキミマナシロウデアレバニヤ或ハ白水郎オホキミマナシロウナレバカシテと云意なり

れり○れる○れ、ツタテヲル
折有オリと云ハヲツタヲツタ或ハヲツテヲルヲツテヲル零有オリと云ハヲツタヲツタ或ハフツテヲルフツテヲルと云意なり礼留レム礼レくと云も上ウヘのか、
已オホによりて結ムスの異なるのみよて譯言ハ同トことあり

○わ部
わくらば ズンジヨラス

五卷^{三十一}、和久良婆^ニ比等^ト、波安流^ハ乎云^ク。九卷^{九丁}、
人跡成事者^ト難乎^ハ和久良婆^ニ成^ル吾身者^ト云^ク。などある
ハ、ゾンジヨラズと云意あり。古今集^ニ、^マくらはよとふ
人あらば須磨の浦^ニ、藻塩^ニれつと^ハ、^マぶと答へよとあ
るも同じ。

わけ ソコモト

四卷^{五十一}、黒樹取^ト草毛刈^ツ、仕目利^メ勤和氣^ケ登^ト將譽^ム十方^ト
不在^ハ八卷^{一丁}、紀女郎贈^ル大伴宿禰家持^ニ歌^ハ。戯奴^ケ反^シ云^フ
之為^ニ吾手^ニ母須麻^ニ尔^ニ春野^ニ尔^ニ拔流^ル茅花^ニ曾^ニ御食^ニ而肥^ニ座^ニ又^ト
書者^ハ咲夜者^ハ戀宿^ル合歡^ル木花^ニ君耳^ニ將見^ル哉^ト和氣^ケ佐倍^ニ尔^ニ見^ル代^ト

などある和氣^ハ、みふ其許^トと云ことあり。さて右の八卷^ニ
、戯奴とあるよつきて、本居氏云、これハ家持卿へ贈る
歌るれば、賤しめて和氣とていふべくもあらぬを、志あ
いへるを、とはむれなり。故戯奴と書て、とむれなるこ
とを顯せせるなり。戯奴の如しといやしめて云る意
なりといへるが如し。又四卷^{四丁}、吾君者^ハ和氣乎^ニ波死^シ
常念^ト可毛^ト相夜^ト不相夜^ト二走^ル良武^トとあるハ、吾君の和氣と
のさまふ吾身を^ハ、死ねろしと思し^トさまへばよの意
にて、和氣の言ハ一ちり。さて又右の八卷^ニ、戯奴之為と
ある歌、家持卿の和へて、吾君^ハ尔^ニ戯奴^ケ者^ト戀^ル良思^ル給^ル有^ル茅

わ、け ワツバク

五卷^{九丁}綿毛^{ソタモ}奈伎^{ナキ}布可^{フカ}多衣^{タキ}乃美留^{ノミル}乃其等^{ノゴト}和^ワ氣^キ佐^サ

我^ガ礼^レ流^ル可^カ布能^{フノ}尾肩^{ミカタ}尔打懸^{ニウチカケ}云^クとあるハ、ワツバク

トタレサガツタと謂^フなり、芽子の歌^{メコノウタ}、宇礼^{ウレ}和^ワ良葉^{ラバ}と

よめる和^ワの言^{コト}ハ、和^ワ可流^{カルク}和^ワ久^ク和^ワ氣^キあど活^{イダク}く言^{コト}

よて、なつれ弊^{ミダ}れとる貞^{サマ}なるべし、空穂^{ソホ}物語^{モノガタリ}、かこびら

の^ノけとるを著^{ツク}てとあるも同^{ドウ}ト。

わ、らば ワツバクトシタ葉

説上^{セツジョウ}よ云^クとる如^スし、ワツバクトシタ葉

○わ部

わあ^{ワア}の^ノオキアカシ 井ザリアカシ

二卷^ハ居^イ明^{メイ}而^ニ君^{キミ}乎^ヲ者^ハ將^{マタム}待^{マツ}奴^ヌ婆^バ珠^{ジュ}乃^ノ吾^ワ黒^{クロ}髪^{カミ}尔^ニ霜^{シモ}者^ハ零^ル

騰^{トモ}文^{モン}とあるハ、起^キ明^{メイ}イテ、或^シハ井^イザリアカイテと云^ク意^イお

り、集中^{シュウジュウ}よ多^タき詞^{コト}あり、

るね ツレテ子^コル ソヒ子^コ

十六^{十六}丁^丁橘^{キツ}寺^{テラ}之^ノ長^{チカ}屋^ヤ尔^ニ吾^ワ率^{ヒツ}宿^{シュク}之^シ童^{ウナ}女^メ波^ハ奈^ナ理^リ波^ハ髮^{カミ}上^{アゲ}

都^ツ良^ラ武^ム可^カとあるハ、ツレテ子^コタ、或^シハソヒ子^コシタといふ

意^イなり、古事^{コト}記^キ穂^ホく手^テ見^ミ命^{ノチ}御^ミ歌^カ、意^イ岐^キ都^ツ登^ト理^リ加^カ毛^モ度^ド久^ク

斯^シ麻^マ迹^{セキ}和^ワ賀^ガ章^{シヤウ}泥^ニ斯^シ伊^イ毛^モ波^ハ和^ワ須^ス礼^レ士^シ余^ヨ能^ノ許^{コト}登^ト其^{コト}登^ト迹^{セキ}と

あるも同^{ドウ}ト。

るむ 井ヨウ

將居將率ちど云ハ井ヨウと俗云同ト

○急部

急む ワラフ

七卷四十道邊之草深由利乃花咲尔咲之柄二妻常可

云也とある咲之ハワラハレタと云意なりニツコリト

ワラハレタバツカリノコトヂヤモウソレデヨイコチ

ノ女房ヂヤトイハレウカイとの謂なり畧解本居氏

の説を引て也ハと添とのみ此字あれば結句をイ

フベシと訓べトといへるをいよそや

急む エヨウ 思妹 豊宴見為今日者毛能乃布能八十伴雄能島

將殖と云ハウエヨウ將居と云ハスエヨウと俗云云

同ト

急らしくに

十九四十豊宴見為今日者毛能乃布能八十伴雄能島

山尔安可流橘宇受尔指紐解放而千年保伎保伎吉等餘

毛之惠良惠良尔仕奉乎見之貴左とあるハホくくと咲

ふ負なり神代紀も嘯樂をエラクと訓字書も嘯同嘯嘯

雄畧天皇紀も歡喜盈懷をエラキマスと訓也續紀廿六

大嘗會豐明の詔も黒紀白紀能御酒乎赤丹乃保仁多末

倍ヘ惠エ良ラ伎キ云ク。又卅卷詔ノも。黒ク紀キ白シ紀キ乃ノ御ミ酒キ食タ倍ハ惠エ良ラ伎キ云クとありて。惠エ良ラ久ク惠エ良ラ伎キなど活用シ云ル言ト見ルえり。

○を部

を モノヲ モノヂヤニ ヂヤニ

一 卷十三委ツ曲ラ毛ニ見ミ管ツ行カ武ム雄ヲ數シく毛モ見ミ放サ武ム八ヤ万マ雄ヲ云ク

ことあるハ見ナガラニ行ウモノヲ或ハ行ウモノヲヂヤ

二 見放サウ山ナルモノヲ或ハ山ヂヤニと云意あり。

をく マ子キヨセル

十七 四十一思シ放フ逸ル鷹ヲ夢ニ見テ作ル歌ヲ呼ク久ク餘ヨ思シ乃ノ曾ソ許コ尔ニ奈ナ

家ケ礼レ婆バ云クとあるハマ子マキキヨヨセルル為シ方ガナケレバと謂ハり十九二十月ツ立タ之シ日ヒ欲ヨ里リ乎ヲ伎キ都ツ追ハ敵ウ自チ努シ比ヌ比ヒ麻マ低テ騰ド伎キ奈ナ可カ奴ヌ霍ホ公ト鳥カ可カ毛モとある乎ヲ伎キも同ト古事記上卷天降條ニ於テ是レ副ソ賜ヘ其ノ遠ト岐キ斯シ八ヤ尺サ勾マ璽カ鏡ニ云ク而シテ詔ス者云クこれ天照大御神の天ヒ石屋戸ニ隱マり坐シとキまねきよせ奉リ一璽鏡を云フ日本紀神代卷ニ風招をカガラキとよめるも同ト拾遺集ニをシとシのハをキ急ニせむとかまへトる云クとあるも招フ餌エなり媒鳥を乎ヲ登ト理リと云フ招鳥ヲの義あり。

をそ ○をそろ ウソ

四卷^{四十} 相見者^{アヒミテ}月毛^{ツキモ}不經^{ヘナク}爾^ニ戀^{コトイハ}云者^バ乎^ヲ曾^ソ呂^ロ登^ト吾^{アレ}乎^ヲ於^オ
毛^モ保^ホ寒^{サム}毳^{カセ}とある^ル呂^ロハ添^ソる^辞よて^虚言^ツあり^即今^{イマ}世^セよ
ウソといふ^ハ同^ト十四^{十四} 可^カ良^ラ湏^ス等^ト布^フ於^オ保^ホ乎^ヲ曾^ソ杼^ド
里^リ能^ノ麻^マ左^サ低^テ尔^ニ毛^モ伎^キ麻^マ左^サ奴^ヌ伎^キ美^ミ乎^ヲ許^コ呂^ロ久^ク等^ト曾^ソ奈^ナ久^クとあ
る^ハ大^{オホ}虚^ソ言^ソ鳥^{ドリ}あり[。]

をち アチ

十五^卅 己^コ能^ノ許^コ呂^ロ波^ハ古^コ非^ヒ都^ツ追^モ母^ア安^ラ良^ム牟^タ多^タ麻^マ久^ク之^シ氣^ゲ安^ア
氣^ケ互^テ乎^ヲ知^チ欲^ヨ利^リ須^ス辨^ベ奈^ナ可^カ流^ル倍^ベ志^シとある^ハ夜^ヤ明^メテ^アチ^ヨ
リと云む^ガ如^シ此^コ歌^カよて^ハ乎^ヲ知^チハ以後^{イコ}を^サす^貫之^ノ歌^カ
よ[。]昨日^キより^フ乎^ヲ知^チを^バ志^スら^ズと^よめ^ルハ[。]昨日^キヨリ^アチ

ヲバと云る^よて[。]此^コ乎^ヲ知^チハ以前^{イコ}を^サせ^リ貞^チ觀^ク儀^ギ式^{シキ}十
二月^ニ大^{オホ}儺^ナ儀^ギよ[。]云^ク与^ヨ里^リ乎^ヲ知^チ能^ノ所^{トコロ}乎^ヲ奈^ナ牟^ム多^タ知^チ疫^{エキ}鬼^キ之^ノ住^{スミ}
加^カ登^ト定^{テイ}賜^ミ比^ヒ行^{キョウ}賜^ミ互^ニ云^クとある^ハ乎^ヲ知^チも同^{トウ}言^{ゲン}よて[。]彼^カ處^{トコロ}を
させ^ルる[。]

をつ ワカバヘル モトヘモドル アトモドリスル

三^三卷^三 吾^{アガ}盛^{サカ}復^{カエ}將^ヲ變^チ若^メ八^ヤ方^ホ殆^ナ寧^ニ樂^{ラク}京^{キョウ}師^シ乎^ヲ不^ミ見^ズ歟^カ將^ヲ
成^{ナム}四^四卷^九 吾^ワ妹^{イモ}兒^コ者^ハ常^{トコ}世^ヨ國^{クニ}尔^ニ住^{スミ}家^ケ良^ラ思^シ昔^{カシ}見^ミ從^{ヨリ}變^チ若^メ
益^{マシ}爾^ニ家^ケ利^リ五^五卷^十 和^ワ我^ガ佐^サ可^カ理^リ伊^イ多^タ久^ク多^タ知^チ奴^ヌ久^ク毛^モ
尔^ニ得^ト夫^フ久^ク須^ス利^リ波^ハ武^ム等^ト母^モ麻^マ多^タ遠^チ知^チ米^メ也^ヤ母^モ又^{マタ}久^ク毛^モ尔^ニ
得^ト夫^フ久^ク須^ス利^リ波^ハ牟^ム用^ヨ波^ハ美^ミ也^ヤ古^コ弥^ミ婆^バ伊^イ夜^ヤ之^シ吉^キ阿^ア何^ガ微^ミ麻^マ多^タ

越知奴倍之六卷四十石綱乃又變若反青丹吉奈良之
都乎又將見鴨又四十從古人之言來流老人之變若云水
曾名尔負瀧之瀬十一朝露之消安吾身雖老又變
若反君乎思將待るどあるハ若ガヘルと云意なり十三
ハ月夜見乃持有越水伊取來而公奉而越得之牟物と
ある越水ハ變若水よてさる藥水を月夜見命の持賜へ
る其を取來て飲ときハ老人も若あへると云古傳のあ
りなるべしされむその變若水ヲ取テ來テ公ニケン
シヤウシテ若カヘラシメウモノヂヤニと云るあり十
七四十放逸鷹歌二手放毛乎知母可夜須伎と云ると廿

卷四十和夜度尔佐家流奈豆之故麻比波勢牟由米
波奈知流奈伊也乎知尔左家とあるとハモトヘモドル
と云意なり或ハアトモドリスルとも譯すべし

を

つ

ホ

ン

マ

五卷十三久志美多麻伊麻能遠都豆尔多布刀伎吕可
憊十七伊尔之敝欲伊麻乃乎追通尔云又三十伊尔之敝
欲伊麻乃乎都頭尔云などありみか俗ハホンマとい
ふよあされり按よ乎都追と宇都追とハ通ひて同言と
きこゆるよ夢よ對ていふよハ宇都追とのみいひ古よ

對へていふよハ乎都追とのみ云也心を付べし
をてもこのも アチウラコチウラ

十四^五又安思我良能乎氏毛許乃母尔佐須和奈乃可奈

流麻之豆美許呂安礼比毛等久十七^四又安之比奇能

乎底母許乃毛尔等奈美波里母利弊乎須惠底云々など

ありアチウラコチウラといふことあり

をどこさび ワカ衆ブリ ワカ衆メキ

さ部さび條合考べし

をどめさび 女郎メキ

上は同じ

をぶよつらなめ 船ヲノリナラズ
十九^廿又布勢乃海爾小船都良奈米とある奈米ハ祢の
伸也こる言よて小船を連ねと云るよて船ヲノリナラ
べと云ことあり

をらす ヌラツシヤル云ゴザル

十卷^八又除雪而梅莫戀足曳之山片就而家居為流君と

あるハ家ヲ造ツテヌラツシヤル君或ハゴザル君と云

意あり

をりあかー 井ザリアカシ

十八^{十三}又乎里安加之許余比波能麻牟保登等藝須安

氣牟安之多波奈伎和多良牟曾とあるハ、宿モセズ井ザ
リアカイテと云意あり。

を、ろ　ワツバくトシタ

六卷十三。春部者花咲乎速里秋去者霧立渡云々。又十四

四春去者岡邊裳繁尔巖者花開乎呼理云々。又同巖者山

下耀錦成花咲乎呼理云々。九卷廿。瀧上乃小鞍嶺尔開

乎烏流櫻花者云々。又二十射行相乃坂上之踏本尔開乎

烏流櫻花乎令見兒毛欲得十三。又十三。春去者花咲乎呼

里秋付者丹之穗尔黄色云々。などある咲乎烏流ハ花の

繁く盛よ咲乱て靡ける貞を云るよて。俗よワツバくト

シタと云意よきこへとり。六卷三十。春去者乎呼理尔

乎呼里鷺之鳴吾島曾不息通為とあるも。花といふこと

をかけまども。乎呼理尔乎呼里と云ふ。花なるよしをも

こせて。志あきあせとるものよて。全同意なり。又二卷十三

二。打橋生乎烏礼流川藻毛叙干者波由流云々とある

も。川藻の繁く盛よ生乱れて。彼方此方よ靡ける貌を云

るよて。同言あり。

上件よむれとる古言。あるハときあやまてりとたか
しきぬしのあるをも。續編と名づけて。つぎよ出すべ

つとめころことをむのどやらよ心あづめてと見む人の
 のむどめまのあとりきいてむごうくめごまとおも
 ひてまごもいさげとこともげよとうけひきまごせら
 ることこのあちならひるり。雅澄をちるけまごこの所
 よもやく心づきてつこのきほどより年久くよるひるの
 カをつくいてふみをあらとをことせり。志う
 よ去年の冬ゆくりなく妻よつこのれことのかるさ
 もけらものよておほやけごとのいとまにも老らる父を
 さねき子どもをやとふことのみよかづらみ身とあ
 りぬるをむとより家まづついでことをささるる志も

だよるけれど手ばうら菜つみ水くみるごて。月日をも
 ころよ。今ハうみ見筆とらることのいとまのけらにあ
 べくもな。志うはあれども。つづよまをらをは名を
 ーつづべーのちれせよきつづ人もといふ古言をさ
 へをりー哉ありー世よ妻よきとよりこびて。夏の目れ
 あつさむいむ。冬の夜れさむさむあらで。あーとゆべ
 の事ごりまのなひは。いさいらもつづころざしれ
 ゆみちうらむことをささけあへりし。そのおもやうの今
 も見るやうにおちゆれば。今むいとまるーとて。かきけ
 ころむれをなほありて。のちつひよ志みのとみこのと

なりあが人こそあらねありがよひつゝ見む魂のいのちに
 ねいなく口をききものと思たましいでやつごのうら
 こころざしれゆうびなきなどをありがよふまも見よ
 ろこびてよとそれをせめての力まいてほとくきえぬ
 傍のしー心を又さらにふるひおこしてよあああかつき
 をいなびいさゝあひぬ傍きほどをねんどてをや
 くよりかきさしたきこる。何くれの巻この下ごきをこ
 さいでふるその中よこの書ハも。うひまなびのともが
 らのよめよとて。みま江の玉江のこもをかさいよもの
 てあささるのに書きてふるこののみふいあればちりほひ

うせなむもなてふことのはとおひふをたりちてそこ
 の心れあつきをもちみてあつべきよりま。これをお
 きて何のい有べきまづこの書をこそとそれよものさふ
 ふらりみらりあこもつみかさあむうずかよひきて
 いうでくとそ。れおちる。ことの切るるによりて。こ
 びかきあつとめ物一つよるむなをあざし巻くハ
 おひをびひいさづきもれせむ哉。

天保八年丁酉八月十四日

藤原雅澄識

